

# 第21回 都市景観フォーラム 記録集

## ■講演1:「横須賀製鉄所と富岡製糸場との関わり」

今井 幹夫さん/富岡製糸場名誉顧問兼富岡製糸場総合研究センター所長

## ■講演2:「海軍とまちづくり」

山本 詔一さん/郷土史家、横須賀市近代歴史遺産活用事業推進協議会会長

## ■パネルディスカッション:

「伝えよう未来へ ～近代遺産のまち～」

コーディネーター:

井田 邦明さん/舞台演出家、ミラノ・アルセナーレ劇場・演劇学校主宰

パネリスト:

久保木 実さん/地域史研究家、郷土史家、三浦半島の文化を考える会代表

越川 昌光さん/ドブ板通り商店街振興組合理事長

山本 詔一さん/郷土史家、横須賀市近代歴史遺産活用事業推進協議会会長

主催:よこすか都市景観協議会

問合せ先:事務局(横須賀市都市部市街地整備景観課内)TEL 046-822-8377



# 第21回都市景観フォーラム記録集

## ■フォーラム概要

名 称 : 第21回都市景観フォーラム  
テーマ : 伝えよう未来へ ～近代遺産のまち～  
日 時 : 平成28年2月7日(日) 12時30分開場 13時開演  
会 場 : ヴェルクよこすか 6Fホール  
参加者 : 217名

## ■プログラム

### 13:00 開会

主催者挨拶 : 増田 務 / よこすか都市景観協議会会長  
共催者挨拶 : 吉田 雄人 / 横須賀市長

### 13:10 講演(1)

今井 幹夫さん  
/ 富岡製糸場名誉顧問  
兼富岡製糸場総合研究センター所長

テーマ : 横須賀製鉄所と富岡製糸場との関わり



今井 幹夫さん

### 13:55 講演(2)

山本 詔一さん  
/ 郷土史家、横須賀市近代歴史遺産活用事業  
推進協議会会長

テーマ : 海軍とまちづくり



山本 詔一さん

### 14:40 休憩

### 14:50 パネルディスカッション

コーディネーター

井田 邦明さん / 舞台演出家、

ミラノ・アルセナーレ劇場・演劇学校主宰

パネリスト

久保木 実さん / 地域史研究家、郷土史家、三浦半島の文化を考える会代表

越川 昌光さん / ドブ板通り商店街振興組合理事長

山本 詔一さん / 郷土史家、横須賀市近代歴史遺産活用事業推進協議会会長



井田 邦明さん

### 16:30 質疑応答

### 17:00 終了

※本書は、フォーラムの内容を記録としてまとめたもので、報告書の内容は事務局の文責で編集したものです。

■会場風景



■主催者挨拶



■共催者挨拶



## 講演 1

### 『横須賀製鉄所と富岡製糸場との関わり』

今井幹夫さん

(富岡製糸場名誉顧問)

兼富岡製糸場総合研究センター所長)



ご紹介いただきました今井でございます。

横須賀には、講演で過去2度、お邪魔させてもらっています。今回で3回目の横須賀になるわけですが、最初の時にお話したのと基本的には同じ形になると思うのですが、その後、富岡製糸場も研究が進んでおり、去年、新しい史料が出てきました。これらを含めて、今日はお話しさせていただきたいと思っています。

ただいま、吉田市長さんから、横須賀製鉄所と富岡製糸場は兄弟だというお話がありましたけれども、本日お配りの「よこすか景観ニュース」というのがございますが、その冒頭に、「近代日本のルーツは横須賀製鉄所にあり！」と、なかなかうまい表現だなと感心したのですが、実は兄弟ではなくて、富岡製糸場の産みの親が横須賀製鉄所だと、私はそんなふうに思っています。

おかげさまで、その子供、富岡製糸場は、その後、どんどん成長しまして、昭和62年まで操業されていた

わけで、115年間、その後も完璧な形で保存されていたために一昨年世界遺産になった。同時に、最初の中核的な建物3棟が国宝に指定された。こういう経過があります。

産みの親と子供を比べた場合、親がしっかりしていたから、いい子供が育ったということにもつながるのでしょうけれども、そんなことをお話しさせていただきます。

本日のテーマは、「横須賀製鉄所と富岡製糸場との関わり」、いわば親子関係であるということをお話ししたいと思います。

これは富岡製糸場ができる前の我が国から外国に輸出されていた品物のトップが蚕糸類、生糸と蚕の種のことです。それが年々どういふふうな変化をしていたかを示したものです。



この万延元年というのは、安政6年の翌年、安政6年に我が国は横浜等を中心に港を開いていきました。その中で、蚕糸類の占める割合が、例えば万延元年（安政6年）の翌年は64%だったのです。これが右肩上がりに増えている。ところが、慶応を境にして残念ながら下がっています。

この理由はどこにあるのか。糸にすれば何でも売れる。蚕の種があれば、何でも売れるということで、ある意味では、養蚕農家の慢心というのでしょうか。粗



製濫造問題というのが起きてくるわけです。悪質の生糸、にせのお蚕の種まで輸出した。それが、慶応を境にして次第に下り坂になってきたという、一つの証拠をお示ししたものです。

ちょうどそのころ、イギリスの視察団が、養蚕の盛んな群馬県、埼玉県、長野県を巡回して、その生糸のありよう、高額になった生糸の値段がどういう実態であるかというのを調べた。

一番始めは明治2年。翌年も来た。実はこの明治2年の中に、富岡製糸場の首長になりましたフランス人のブリュナも含まれていた。

この明治2年の結果を、報告書の中で提言をしているのです。日本の生糸の悪さというのはどういうところにあるのか。一つは、ヨーロッパの製糸器械と製糸法を早くに導入すべきである。そのためには多額な費用を要するが、日本の現状においては無理がある。

また、一つの条件は、大工場は年間操業可能の繭の確保が必要である。これは当然です。

そして、この条件を満たすのは、現在の状態の中では、上州か信州（長野県）以外にはないということ、明治3年の1月に提言しているわけです。

これを受けた政府は、イギリス視察団の提言のあった直後の翌月に決断をしたのです。それは、ヨーロッパの製糸器械を導入する。外国人を指導者とする。全国各地から工女さんを募集して、技術を習得した工女さんは、地元に戻ってリーダーとなる。この神奈川県からも相当数の工女さんが来ています。そして地元に戻って指導者になる。こういう模範工場として立ち上げられたのが、実は、富岡製糸場ということになる。

では、その中で、なぜ富岡が選ばれたのか。幾つかの条件があります。

富岡町というのは、慶長年間に新たにできた町になるわけですが、当時から養蚕が非常に盛んだった。さ

らに原料繭の確保ができるということ。

外国人が指導者の工場に対して、富岡町民が同意したということ。当時はまだ、尊皇攘夷思想が形を変えてかなり強く残っていたわけです。ところが、富岡町民の場合については、外国人が来て、工場の指導をするのは結構だという同意書まで提出しています。現在その同意書が残っています。

3番目は、広い敷地が安く確保できた。それから大量の水が確保できる。蒸気エンジン、これは横須賀製鉄所も蒸気エンジンを使っているわけですが、それよりも馬力は低いのですが、その燃料としての石炭が近くから確保できる等々の理由で、富岡が一番いいということで、選ばれたのです。

一つだけその中で条件が満たなかったのが、交通の件です。生糸が横浜に出て、それから外国へ行くわけですが、当時はまだ列車等は一切ありません。こういう問題は抱えていましたが、やがて交通機関が発達するから、そのときでいいということで、交通の件はクリアさせたということなのです。

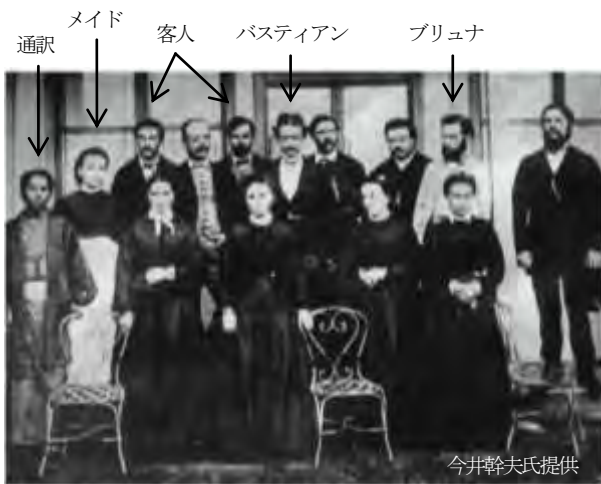
当時の富岡町というのは、こういう一本線なのです。



この後のパネルディスカッションでも、横須賀市の街なかのことが出てくるようですが、これは明治3年に描いた絵図ですが、この道路の周辺に家があるだけで、まだこういうところにわずかしかが家できていないです。

現在、これ全部、家が変わっていますが、この中で富岡製糸場ができたのがどこかという、ここ（☆）なのです。皆さん、おいでになるときには、多分この道を通って、富岡製糸場へおいでになる。あるいはこちらからおいでになることになるわけですが、その道は、富岡製糸場ができてからつくられた道であるということが、おわかりになるかと思えます。

フランス人をリーダーにするということで、下の写真に、フランスから雇われた方が写っています。



この中央に、前列に女性が4人、日本人女性に生糸の取り方を指導した人です。中心になった方は2人。その1人がポール・ブリュナです。先ほど申し上げたように明治2年のイギリスの視察団のときにも、既に加わっている。生糸については専門家であったという評価が高かった。もう一人がバスティアンです。

この中に2人「客人」というのがいるのです。この人はどなたかわかりません。これは明治5年か明治6年ごろの写真ですが、明治6年ごろに富岡製糸場に来た外人は何人かいるのです。これはまた後でご紹介したいと思います。そういう人かもしれませんが、確定はできていません。この人は、ブリュナに雇われたメイドさんです。この人は通訳です。このような人が来ているわけですが、この中で横須賀と関係する人がバスティアンです。この人を詳しく説明したいと思

います。

このようなフランス人が集団として雇われ、ブリュナを中心として、富岡製糸場の建築、経営等を調べていったということになる。

ご承知のとおり、ヴェルニーというのは横須賀造船所のトップ、リーダーです。富岡製糸場のリーダーがブリュナ。これは家族同士のつき合いをしているわけですが、ヴェルニーのフランスに残る資料の中で、ブリュナがヴェルニーに宛てた手紙が見つかったのです。

何が書いてあるかということ、横須賀製鉄所の建築技師、バスティアンがヴェルニーの紹介によって富岡製糸場の図面を引いています。そのバスティアンを見つけてくれた、バスティアンが非常に優秀だということ、を、まず述べるのです。

この後、ブリュナは、フランス製器械等々を発注するために出かけるわけですが、その辺りが書いてあります。

「航海」という言葉が書いてあります。これは要するに工事の進め具合で、船ではないのです。ようやく半分を過ぎただけである。ここでもう一つ申し上げること、木骨煉瓦造、これは横須賀製鉄所をそのまま、まねているわけですが、窓をつけるときに、横須賀製鉄所の場合には、柱に沿って窓ができています。ところが富岡製糸場の場合には、柱が中心にあるのです。これで本当に大丈夫なのかという、いわば質問です。ただ、これは質問ですから、回答はわかりませんが、現在の窓は、そのような形になっていますので、多分オーケーだよという返事が出たものと見てよろしいのではないかと。手紙の日付が明治3年の11月で、これは、ブリュナがフランスへ出発する直前に書いた手紙だということがわかります。

これは製糸場の建物の図面です。

### 富岡製糸場の建物



今井幹夫氏提供

写真がちょっとぼけていて申しわけないのですが、横須賀製鉄所と同じトラス工法。これはまた後で出てきますので、ご覧いただければと思います。

しかし、横須賀製鉄所と富岡製糸場では違うところがあります。横須賀製鉄所の場合は、海辺の砂地で地盤が軟弱のところから基礎を固めるために大量のパイルを打ち込んでいるようです。これに対して富岡製糸場は地盤が硬いためにパイルは打ち込んでいません。そういう地盤の関係で、建て方が若干違うかなという感じがします。

「よこすか景観ニュース」の右下をごらんください。これは横須賀で発見された煉瓦でございます。これは刻印が押ししてありまして、「ヨコスカ製鉄所」と右から書いてあります。



横須賀市自然・人文博物館蔵

これが富岡から見つかった刻印です。

「ヨコスカ製鉄所」全く同じです。わずか1点見つかったのです。

### 横須賀製鉄所の煉瓦



今井幹夫氏提供

しかも、これは地中から採取されましたので、実際にこれが使われたかどうかについてはわかりません。しかし、これが横須賀から運ばれてきたのは間違いのないと言えらると思います。

もう一つ、これも大分劣化しておりまして、わかりにくいのですが、ここには造船所と刻印があります。

### 煉瓦の拡大写真



今井幹夫氏提供

横須賀製鉄所は、明治になって造船所が変わってきましたよね。造船所の刻印が打たれたものが、富岡で見つかった。これは明らかに横須賀から富岡へ行ったもの。見本、サンプルとして富岡へ持っていったものと現在判断しているわけですが、数が多くないだけに、そういう解釈をせざるを得ないということになるわけです。

さて、各建物の建築の順序ですが、色々な写真や資料から見て、最初に繰糸所、次に東繭倉庫(東置繭所)を完成してから西置繭所などの中心建物に移っていったと思われます。繰糸所の建築が始まってから主要の

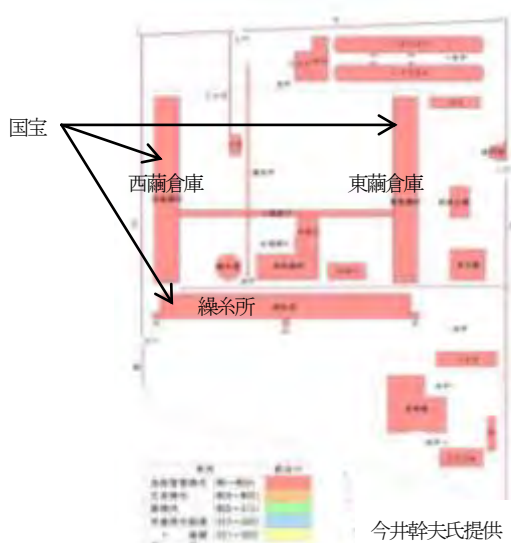


建物が仕上がったのは僅か1年4カ月ぐらいですから、本当にいわば突貫工事で、作業を進めていたということはおわかりになるのではないのでしょうか。

繰糸器械の動力源は蒸気で、燃料は石炭を使用しました。その煤煙を空中放散するための煙突は約37メートルもありました。この煙突を立てるために木材や竹材を使って煙突よりも高い足場を組んで仕上げたようです。もう一つ注目しておきたいのは煙突の最上部に最初から避雷針を設置していたということです。なお避雷針は繰糸所や東西の置繭所にもありました。我が国の煙突の歴史を調べてみると、金沢に所在する前田利家を祀った尾山神社の神門に設置された避雷針が一番古いものとされてきたようです。この神門の建設は明治8年ですので、富岡製糸場の方が古いということになります。横須賀製鉄所に避雷針があったかどうかは不明ですが、首長のヴェルニーは灯台も立てており、それには避雷針を設置していますのでそれらの影響があったのかもしれませんが。

これが当時の富岡製糸場の平面図です。これは全部、国の史跡に指定されました。

これが全部世界遺産になったわけですが、特にこの糸を取る工場、繭置き場、この3棟が国宝に指定されたものです。この状況についてはまた後で出てきます。



いよいよ建物が仕上がって、日本各地から工女が入ってきます。これらがフランスから輸入した繰糸器械なのですが、そこで働いている様子が出ています。



工女さんの場合は15歳から25歳、一応、若い方々を中心に工女さんになってもらっていますが、その作業風景を撮ったものです。

次に、昨年の開業150年の企画展で展示されたおもしろい手紙についてお話しします。

モンゴルフィエ、これが先ほど申し上げた、やがて横須賀製鉄所の会計課長になった人ですが、この人が明治6年に、富岡製糸場に仲間を1人連れて来ており、その様子を祖国に送っているのです。

明治6年6月27日に、フランス企業のドレルを伴って富岡製糸場に赴いた。雨の中、大宮で富岡製糸場に行啓された帝の妃と母宮、これは、英照皇太后と後の昭憲皇太后のことですが、両后がお帰りのときに大宮で会った。29日に、新町というところから、この富岡製糸場のためにわざわざつくった道を通って富岡に到着した。この両后がお見えになったのは6月23日ですから、本当に直後ということになります。

また、なぜこの富岡製糸場が選ばれたか。富岡蚕糸業に占める位置や立地条件の点から、特にこの場所が選ばれた。先ほどのなぜ富岡なのかと言っていることを、彼は見抜いているわけです。気候が非常に乾燥しているのです、生糸の腐食も防げる。こういうことも書

いています。

さらに、ブリュナの館で昼食をご馳走になっているのですが、フランス人の料理人がこしらえ、給仕もフランス人の召使い。このようなことは、この辺の国ではめったにないことである。ブリュナという人はいかに待遇がよかったかということにもつながるのです。

もう一つおもしろいのは、繰糸所は、監督役の教婦、富岡の場合には取り締まりという名前になっていますが、繭を補給する若い衆、これは男の人でしょうね。その後ろに小枠に取った糸を輸出用の大枠に巻き換えるのですが、二度手間になるような作業は、母国では見たことがない、こういうことを言っています。

フランスの場合には、大きな枠にいきなり糸を取っているのです。富岡の場合には小さな枠に取ったものを再度大きな枠にあげ返している。フランスの器械からみると若干、旧式ということになるわけです。あえてブリュナはこれを導入した。というのは、従来、日本の繰糸工法はすべて座繰りであり、これを器械製糸に取り入れることによって工女が活かされ、結果的には生産性の向上を促すという見解のもとに、この工法を導入したのです。

彼は、特に組織運営と監視体制が注目に値すると、感心しました。彼女らは、住まいと食事と教育が施されますが、寮内に足どめされ、外出は日曜祭日のみ。しかも2人ずつ組になっての外出です。

待遇面はいいのですが、監視体制は、ある意味では非常に過酷でした。最近、この原型がフランスにあったということがわかってきたのです。フランスのボネという製糸場があるのですが、その工場の規則とほとんど同じなのです。そういうものも導入しながら、若い工女を育成していったということが言えるのではないのでしょうか。

これが、フランスから導入してきた繰糸器械の一部

です。



小さな枠に糸を取っています。ここに鍋が二つありますが、自分で繭を煮て、その糸口を見つけた繭をこちらへ移動して、ここで糸を取る。こういう形です。

先ほど富岡製糸場はどんどん成長したと言いましたが、実は、経営主体者も変わってきているのです。官営からやがて三井、そして原合名会社、これは三溪園も所有していた原です。最後は片倉。その間には、歴史的な大きな変化もあり、経営者の変遷はしましたけれども、115年間全く同じ生糸一筋の生産であったのは、よくおわかりになるだろうと思います。

建物は当初のものほかに附属建物を増やしていますが、糸を取る工場、これだけです。この生産性を高めたために、そういう附属の建物を造って、それを整備したということになるわけですが、基本的には、明治5年に操業開始したときの建物が、ほぼそのまま残っているところに富岡製糸場の特色があるということです。

これは、南から見た富岡製糸場の写真です。

これが糸を取る工場の繰糸所、これは繭倉庫、実は繰糸所の方が長いのですが、写真で見ると、繭倉庫の方が長いように見えますが、繰糸所は140メートルなのです。この繭倉庫は104メートルぐらいですから、40メートルも繰糸所の方が長いということになるわけですが、写真で見るとこういう形になります。



今井幹夫氏提供

同じものを、位置を変えて撮ったものです。



今井幹夫氏提供

周辺に家がこうも建ち並んできています。当初はほとんど畑だったのです。

これは、錦絵、開化絵といいましょうか。文明開化の一つのシンボルとして、こういうものを印刷して、お土産としているということが、よくおわかりになると思います。



今井幹夫氏提供

これは正面から撮ったものです。



今井幹夫氏提供

実際おいでくださった方はよくおわかりかと思いますが、明治5年というキーストーンがございます。



今井幹夫氏提供

かなめ石です。明治5年建ち上がって、操業を開始したということが、これでおわかりになると思います。

実は、この建物が横須賀製鉄所に非常に近いという。煉瓦の積み方が、長い煉瓦、小口、長い煉瓦、横の変化です。横須賀製鉄所の場合も、例えば副首長のティポディエのお宅もこうだった。今、解体して保存されておるようですが、ただ、源流は横須賀製鉄所にあったということ。こういうところをご覧いただければと思います。

これは、私がフランスへ行って撮ってきたのですが、全部石造です。どこかわかりますか。



今井幹夫氏提供



ベルサイユ宮殿なのですが、実はこの煉瓦の積み方も富岡製糸場と全く同じなのです。ということは横須賀製鉄所も同じです。こういうものが、フランスの特に北部に非常に多いわけですが、これが横須賀、そして富岡に遺産子として伝わってきているということになります。

これは今、言った宮殿の手前にある建物です。



高い塀で、中はどうなっているかわかりませんが、これを大写しにしたものがこれです。



全く同じですね。

ちなみに、最近復元されたばかりの東京駅ですが、この煉瓦はこういう積み方。



小口積みです。

煉瓦の積み方は何種類かありますが、日本に最初に入ってきたのはフランス文化、だからフランドル積み、最近ではフランス積みといっていますが、この流れが、

我が国の煉瓦の歴史の第一歩であるということにもなるわけです。

これは繭倉庫の1階の部分で、



これが2階の部分です。



幅が12.3メートルあるわけですが、広角レンズで撮ると大分狭く撮れてしましますが、この2階に繭を満載して、1年間経営を続行していくということになります。

これはフランス人の男子の検査人の宿舎です。



現在、私どもの事務所として使っているものですが、これは東側を見たものですが、1階、2階にも廊下といたしませんか。ティボディエ家も、実は、こういう廊下がありましたね。写真が残っていますが、要するによくコロニアル様式と言われるものです。





今井幹夫氏提供

この源流も横須賀にありました。

今回、世界遺産になりました長崎のグラバー邸、あそこもちゃんとしたコロニアル様式のテラスがありますね。

これは1階、2階ともにございますマンツルピース。



今井幹夫氏提供

これは現在もそのまま残っている。残念ながら、現在は使える状況ではございませんが、こういうものがある。さらに浴室にはバスタブも残っている。ですから、富岡製糸場の場合には、生活の部分まで残されているということになるわけです。

これは、フランス人使用人のものです。



今井幹夫氏提供

これは繰糸場です。



今井幹夫氏提供

これがいわゆるトラス工法、三角屋根。

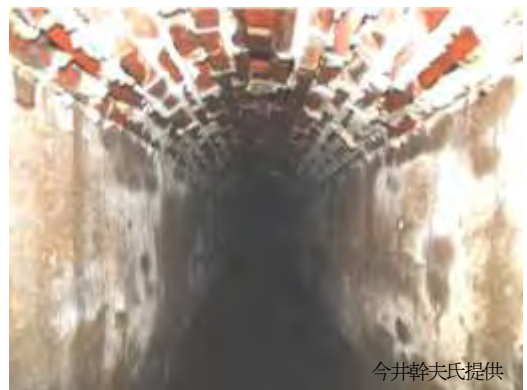


今井幹夫氏提供

これも横須賀製鉄所で立ち上げたものです。ただ日本に伝わってきたのは、2番目のものということが出来ます。広い空間をつかって、ここにフランスから運んできた器械を全部据えつけました。現在の機械は日産自動車が開発した、昭和62年まで操業を続けた器械で、最初のものではございません。

当時は電灯がありませんから、いかに自然の光がたくさん必要かということで、窓をたくさんつくっているというところに大きな特色があります。

これは下水溝です。



今井幹夫氏提供

普通、開渠の場合が多いのですが、これは暗渠になっているのです。繰糸をした後の水は、非常に汚れが激しいのです。したがってこれがよどむと悪臭がする。環境衛生のために、あえて下水溝をつくったと見てよろしいのではないかと思います。

これがブリュナ館です。西から見たもの、まさにこれがコロニアル方式のテラスがずっと続いている。



今井幹夫氏提供

これも残念ながら、まだ一般公開していませんが、地下室がございます。

市長さんを、ここまでご案内したかどうか覚えがないのですが、この地下室で肉類やワイン等を保存したものと考えています。



今井幹夫氏提供

この西蔵倉庫の礎石を見ていただきたいと思うのですが、ほとんど不同沈下していません。



今井幹夫氏提供

150年近くたっています。わずかに2センチの誤差があつて、いかに地盤がしっかりしていたかということもあつると同時に、きちんと礎石をつくり上げてきたということが、これでよくわかります。

これは、一番初めにご覧いただいた煙突の一部です。こういうものまで今、残っていて、使われています。



今井幹夫氏提供

これは鉄水槽です。



今井幹夫氏提供

繰糸をするのにたくさんの水が必要です。最初は煉瓦造の水槽だったのですが、すぐ水漏れがしまして、別の水槽にかえたのですが、これは横須賀製鉄所のいわば子分ぐらいになる横浜製鉄所で作ったものです。設備・施設の中で唯一の国産品なのです。これも今回の重要文化財に入っています。



これが明治41年ごろの写真です。



今井幹夫氏提供

煙突が高いということの意味が、おわかりになると  
 思います。これは、煙突が低ければ、この黒煙はすぐ  
 下に流れ出て、生糸を汚します。そこで働く人の環境  
 にもよくない。そういう配慮をもって煙突を高くした  
 可能性があります。

いよいよ世界遺産ということになるわけですが、2  
 年前に世界遺産になってはいますが、次の形でユネス  
 コに提出したわけです。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、長い間生産量が  
 限られていた製糸の大量生産を実現した「技術革新」  
 と、世界と日本との間の技術の「交流」を主題とした  
 ものである。ここが本当に大事だ。近代化、外国との  
 関わり合い、その大量生産がやがて一般の人々にも広  
 がっていった。この源流が富岡製糸場であるというこ  
 とを訴えたわけです。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」  
 4つの構成資産

富岡製糸場(史跡・重要文化財) 富岡市



- 明治5年(1872)に明治政府が設立した官営の器械製糸場。
- 和洋技術を混交して建てられた木骨煉瓦造の繭倉庫や繰糸場などがほぼ完全に残る。
- 民営化後も一貫して製糸を行い、製糸技術開発の最先端として国内蚕業・製糸業を世界一の水準に牽引した。

これが絹産業遺産群、富岡を中心として、田島弥平、  
 これは養蚕農家です。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」  
 4つの構成資産

田島弥平旧宅(史跡) 伊勢崎市



- 通風を重視した蚕の飼育法「清涼育」を大成した田島弥平が、文久3年(1863)に建てた主屋兼蚕室。
- 瓦葺き総二階建てで換気のための越し屋根を備えた構造は、近代養蚕農家の原型になった。

これは同じ養蚕学校です。高山社跡。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」  
 4つの構成資産

高山社跡(史跡) 藤岡市



- 高山長五郎は、通風と温度管理を調和させた「清温育」という蚕の飼育法を確立した。
- この地に設立された養蚕教育機関高山社は、その技術を全国及び海外に広め、「清温育」は日本の標準養蚕法になった。

これはお蚕の種を貯蔵するものでございます。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」  
 4つの構成資産

荒船風穴(史跡) 下仁田町



- 岩の隙間から吹き出す冷風を利用した国内最大の蚕種(蚕の卵)の貯蔵施設。
- 冷蔵技術を活かし、当時年1回だった養蚕を複数回可能にし、繭の増産に貢献した。

この四つが世界遺産に今回登録されたということに  
 なります。四つの施設は、関わりをお互いに持っており、  
 単独ではないということです。



その結果、ユネスコが、富岡製糸場は世界遺産にふさわしいということを書いた長い文章をまとめたのがこれです。

### 世界遺産の登録(H26.6.21)

- ・ 四施設は生糸の大量生産のための一貫した集合体の優れた見本である。
- ・ 富岡製糸場は、産業としての養蠶技術をフランスから日本に、早い時期に、完全に移転することに成功したことを示している。
- ・ 設計段階から工場を大規模なものにしたことと、西洋の最良の技術を計画的に採用したことは、日本と極東に産業の方法論が伝播する決定的な時期だったことを示している。
- ・ 19世紀後半の大きな建造物群は、和洋折衷という日本特有の産業建築様式の出現を示す卓越した事例である。

四つの施設が、一貫した集合体である。特にこの2番目、3番目、4番目については、富岡製糸場のことを述べているわけです。いわば富岡製糸場と絹産業遺産群の核となった富岡製糸場がこういうものであるということを知ることができたというものになる。

世界遺産になったために、その10月には、先ほど申し上げた3棟（繅糸所、東繅倉庫、西繅倉庫）が国宝に指定されています。

これは西繅倉庫を、今、解体して調べている最中です。全部、大屋根で覆ってしまいます。向こうのほうで、まず大屋根をつくって、スライドさせるのです。



今井幹夫氏提供

この一部を現在、一般開放して、こちらへ上がって見学できるような形にしています。



今井幹夫氏提供

これは、解体中の1階の床板を剥いだ様子です。



今井幹夫氏提供

よく見ると非常に華奢な木材が使用されていますが、当初のものではありません。こういうことがわかりました。

次に煉瓦の状況ですが、ほとんど劣化はしていないというものの、こういう上部には、だいぶ隙間があります。





今井幹夫氏提供

これは自重で下がって、上部があいてしまいました。これらは修理して安全性を保つ必要があります。

屋根瓦をはぎ始めています。現在、ほとんど終わりました。これは一つ一つの屋根瓦に、刻印が打ってあることを示したものです。これは、こういう⊕とありますが、瓦師の屋号だと思います。

### 瓦の刻印



今井幹夫氏提供

これは、棧瓦をはいだあとですが、これだけの土を載せて、さらにその下に杉皮をのせています。野地板が一番下です。

最近、棧瓦だけでおよそ4万7,000枚あることがわかりました。この上に丸瓦等があります。これを含めると、1棟で大体7万枚弱でございます。これが3棟あるのです。全体として、いかにたくさんの瓦を焼いたか。これは杉皮、杉板を張っているのです。

### 野地板の上の杉皮



今井幹夫氏提供

一つ、棧瓦の裏面にこういう刻みがあるのです。船の形で何か横須賀が連想されます。

### 瓦の落書



今井幹夫氏提供

ところがこの瓦屋さんというのは、横須賀には関係ないのです。今でいう埼玉県深谷の方ですから、その方がなぜこういう船のいたずら書きをしたか。これは3枚しか見つかっていないのです。これはなぜなのでしょうが、何か横須賀製鉄所と関わりがあるかどうか。これも調べる必要があると思います。

ということで、ちょうど時間の中でおさまりました。本当はもっと長くおしゃべりしたいところなのですが、与えられた時間でおさめることも、話のわざだと思えますので、以上でおしまいとさせていただきます。

(拍手)

## 講演2

### 『海軍とまちづくり』

山本詔一さん

(郷土史家、横須賀市近代歴史遺産活用事業

推進協議会会長)



ご紹介いただきました山本でございます。

市長さんが、私のことを横須賀の「誇り」だと言っていました。誇られるものなのか、埃なのかわかりませんが、悩んだりしないほうがいいだろうという思いがあります。

昨年もここで講演させていただいて、さんざん市の姿勢に対する悪口を言った後に、いろいろなことをいろいろなところで、いろいろな人から意見をいただきました。楽しい意見もありましたし、よかったなと思ったこともありました。

今日は「海軍とまちづくり」というお話をさせていただきます。

海軍とまちづくりという、これ、「横須賀明細一覽図」といい、横須賀のお土産だったもので、ここに挙げたものは「改正實測横須賀一覽圖」と書いてあります。一番古いものは、明治12年のもの。これは、明治39年に出された一番最後のものです。全部で8種類ぐらいあります。

実は、これ、いろいろと変わってしまっていて、これが一番デフォルメされているものなのです。



この「一覽圖」というものがずっとお土産として使われていました。日清戦争の直前と、日露戦争の直前の一時期だけ見学が許されないこともありましたが、横須賀の観光の一番の目的は、造船所の中を見学しに来るといった人が多かったのです。

特に明治20年代の初めまでは、横須賀に来る人たちの多くは造船所へ来るというので、十数件旅館がありました。平日の少ないときでも、各旅館に十数人ずつ泊まっていました。ということは100人以上、何百人という数の人が平日でも来ていました。

それが、多い時には1件の旅館で100人を超える日があるということが言われていますから、その時は4,000人を超えるような人たちが来ていたのです。

富岡製糸場が世界遺産になった途端に、平日でも2,000人の人たちが訪れるようになったということを知りまして、「わあ、すごいな」と思ったのですけれども、実は横須賀でも、多い時には4,000人ぐらいの人たちが観光に訪れ、この中を見て回りました。もちろん個人で写真技術など持っていませんから、何かこの中で見たものを、どういうふうにして持って帰るか考えたときに作られたのがこの「一覽圖」で、これを見せながら「この中、行ったらすごかったよ」という話をするわけです。

鉄が豆腐のようにすぼんと切られてしまう。鉄の塊に大きな穴がすっと開いてしまう。そういうようなものを、ここで実際見せるわけです。その中の一つの機械が、今、ヴェルニー記念館にあります、あの3トンハンマーです。あっという間に鉄が平らになって伸ばされていく。あれは鉄を鍛えるものでありまして、そんなに伸ばすものでもなかったのですけれども、でもそういうような形で、鉄の加工品がどんどんできていきました。今までは、鍛冶屋さんしか見ていない日本人たちにとりましては、これは非常なショックとして見ていたわけです。

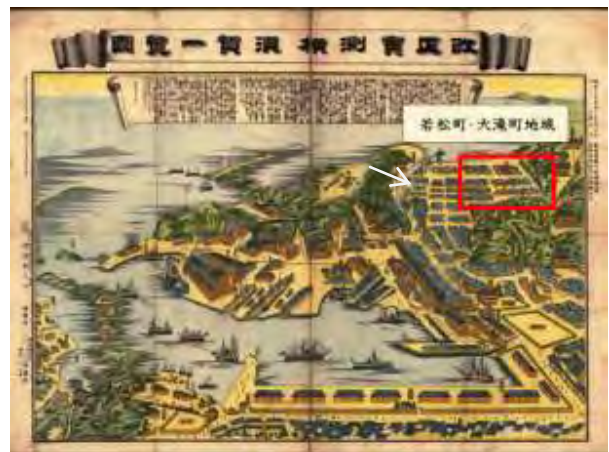
この絵には、もうすでに旭町とか山王町とか諏訪町、元町、汐入、汐留と書いてあります。現在、残っているのはこの汐入だけです。今、このエリアをみんな本町と呼んで、また隣接するエリアを汐入と呼んでいるわけです。住居表示はわかりやすいほうがいいので、今の住居表示としては大変よろしいと思うのです。でも、電柱のところについていたり、家のところについていたりする住居表示のプレートに、ちょっと気を利かせて「旧旭町」とか「旧山王町」とかって入っていると、ここへ訪れた人が「あ、昔はこういうのがあったんだ」と考えると思うのです。そして今、横須賀市開国史研究会で出していますリーフレットで、18年版というのを見ますと、みんなこの通りに名前が入っているのです。実際に、それを見ながら歩くと「あ、今、私が歩いているところは諏訪町だわ」とか「あ、俺が歩いているのは山王町だ」「元町というからには、この辺が中心だったのか」とかというようなことがわかって、横須賀の街を歩くのが楽しくなると思います。

「そのぐらいのことはやっても、そんなにお金がかからないし、大丈夫でないですか、横須賀市さん」と言っているのですけれども、横須賀市というのは、頭の中に入らないで、ふとこっちへ抜ける、そういうシ

ステムになっているのでしょう。

それからこのエリアですが、それまで横須賀村だったのが、明治9年に横須賀町に昇格しました。それと同時に山王町、旭町、諏訪町、元町、汐入、汐留、まだこのほかに汐留新道とか、さまざまな町名をつけて使われるようになってきたということなんです。

明治11年になりますと、郡区町村編制法というのができてまして、三浦郡の中の横須賀町となりました。それまでは三浦郡というのが大きなくくりではあったのですけれども、行政的な役割は何もしていなかったんです。ここで初めて三浦郡というのが大きな役割をして、三浦郡の中に何町、何村というのができてきて、このエリアに郡役所ができます。汐留新道というところにてきてまして、後のパネルディスカッションで、写真が出ると思いますけれども、この辺がそうです。



明治9年にこういう町ができたのですけれども、この辺のエリア、実はこの辺が若松町なんです。この辺が大滝町、さらにこの辺が小川町なのです。

実際には、もうこのときには若松町はかなり発達しています。明治39年のときには、若松、大滝、小川というのが横須賀の市街地エリアとしての中心的な存在となり、特に商業、それから飲食、それから遊興などというものは、このエリアが大変に活発になってきました。

こちら側の汐入エリアはというと、今は職工さんと

という言葉はいけないのでしょうか。この造船所で働く労働者の方々の宿舎と、それからそれに関わる官庁街に変わってきています。そんなふうにして変わってきたのが、この図中に見えるわけです。

明治18年になって初めて横須賀というのは海軍の街になるのです。もちろん明治11年代に、ここは軍港と指定されました。猿島のところから、ずっとこのエリアが軍港の指定を受けました。この中に入る船も、軍艦でなければ入れなくなってきました。

今もこの中のエリアに入れる船は、トライアングルさんの軍港めぐりの船と、海上自衛隊の潜水艦と米海軍の船しか入れないのです。

自分たちで船をおろして、ゴムボートで行きますと、パトロール船がぴゅーっと来て「何やっているんだ」と言って、アメリカへ連れて行かれます。向こうで英語で尋問され、日本の通訳の方がいますからいいのですが、そんなようなことになります。

実は明治9年に横須賀町ができたときはここまででしたが、明治11年になりますと、若松町の埋め立てが終わり、小川町ができて、この流れの中で、大滝町のこここのところに遊郭ができたのです。

遊郭というのは、私的にはよくわからないところなので何だろうかと、今、一生懸命研究中なので、来年も呼んでいただくと、遊郭というのがどういうものであったかというお話ができるかと思います。

大体、明治11年、12年ぐらいになりますと、小川町、大滝町、若松町というのがこのエリアの中に入ってきます。

しかし何といても、明治17年の12月に鎮守府ができて、そうすると何が変わるのかといいますと、海軍さんの数が圧倒的に増えるのです。

鎮守府というのは、大変重要な役割をしています。特に明治18年のときの鎮守府というのは、日本に一つ

しかありませんでした。二つ目の鎮守府が長崎にあったというのですけれども、それは仮の事務所でした。こちらは東海鎮守府といって、すぐに横須賀と名前を変えるのです。第二となる西海鎮守府はというと、広島県が一生懸命に誘致運動を盛んにしたり、「いや、長崎だ」という意見もあつたりして、結局、明治22年まで西海鎮守府というのはできませんでした。

横須賀に日本で最初の鎮守府ができますと、ここに所属する船の全ての動きを管理しますし、作戦もここです。当然、全ての動きを管理するということは、今日のように、人工衛星だといってテポドンを打ち上げるような事態になったとき、艦船に「出ていけ」と出動命令が発令されたときには、1カ月かかるかもしれない、10日かかるかもしれない、それ相当の食料を積んで急速出港といった命令も、全部ここから出せるわけです。

艦船が帰ってきて、船体が傷みましたといえば、このドックで修理をします。さらに、こういう新しい船がどうしても必要になると、ここに造船所がある。こういうものまでも、全部海軍のこの中の機関で行うようになってきます。

当然そうなりますと、海軍さんの一番上は海軍大将で、一番下は三等水兵というのまでいますが、その上のほうの中枢の人たち、要するに、将校と言われている人たちが、この横須賀の町に大挙して押しかけるようになります。

この時代は、横須賀に、まだ横須賀線が引けていません。この図はもう明治39年ですから引けているのですけれども、当時は横須賀線がありませんでしたから、横須賀の町に住まなければなりません。しかし、海軍さんの将校になりますと、ひとり住まいなんていうのはありません。「俺、アパートでいい」「マンションでいい」というわけにいかないのです。まだこの時代、



高層はありませんから。

そうすると、どうしても家の区画が広がってくる。広い区画が必要になってくると、「あれ、横須賀、狭いな、やりづらいな」と気付き、「じゃ、歩いて通える範囲で探そう」となります。そうすると、この上町のところ、中里ですとか、深田、佐野、坂本、それから逸見の山の上というところに家を建てていくこととなります。今でもなぜあんな山の上にこんな大きくしつかりした家があるのかと思いますが、この時代の海軍士官さんの家だったのです。それから造船所も定着し、それなりになってきますので、人もどんどん増えてくるということになります。

その海軍鎮守府ができますと、船だけではなくて、どうしても陸上の交通インフラも必要になってくるのです。普通は、海軍がこういう軍港をつくりますと、この軍港を守るために、陸軍の砲台ができるのです。

でも横須賀の場合は、意味合いが違ってまして、東京湾の奥には、東京という明治政府の首都がありました。その首都を守らなければいけないということで、鎮守府が置かれる前、軍港になる前、明治14年から、もうすでに観音崎に砲台ができ始めてきます。ですから、この砲台がどんどん大きくなっていきました。

そうすると陸軍のほうは、どうしたって、船で運ぶよりは陸上から運びたいというがありました。この時代、交通機関といったら鉄道しかないので、鉄道を何とか引きたいということになってくるわけです。

明治22年の6月に鉄道が引けました。明治17年(1881年)12月に鎮守府ができましたけれども、それからわずか4年半で、鉄道が引けるようになりました。それがJR横須賀線、全国の鉄道の中で初めて地名を使った鉄道です。

横須賀線というのは、ただそれだけではないのです。さすがに海軍の街ですから、海軍の将校さん、海軍大

将、三等水兵が一緒の席に座れません。ですから、横須賀線には二等車がついていまして、士官はそこにか乗ってはいけないと言われたんです。明治時代は三つに分かれていました。そうすると、「ああ、さすがに海軍の街だな。でもあれはお金を出せば乗れるのだから」といって、ここで稼いだ小金持ちは、ちょっといい気持ちになったりしました。「俺たちはそこで働いている人とちょっと違うぞ」という、そういうプライドを持てる鉄道になりました。これが一つ、この中の決定的ものでした。

先ほども言いましたが、西海鎮守府というのがなかなかできませんでした。どうも、清国、今の中国との関係がうまくいかないということで、これから先はやはり中国戦というものを考えていかなければならない状況となり、明治22年の4月に、呉と佐世保に鎮守府ができます。

鎮守府ができるということは、ただ海軍の役所ができただけではなくて、船を修理すること、また船をつくることも必要になってきます。そうすると、「おい、ここで鎮守府をつくるから、周りの連中みんな集まって手を貸してくれ」、「船をつくるから、船を直すから」と言われても、近代技術でつくられた船は、そんな簡単には直せません。どうしたらいいかといったら、ここにいました横須賀の人たちが大挙して佐世保や呉に行ってしまうました。明治22年の4月に呉・佐世保が開庁しましたが、それからの横須賀というのは、非常に寂しい状態になりました。

それに輪をかけまして、地図の下の部分、ここ、湊町に全部倉庫が並んでいますけれども、実は明治18年の地図を見ますと、ここに旅館がたくさん並んでいます。



ここは、明治4年に埋め立てた土地なのですが、湊町という町があったんです。その湊町が明治22年2月1日に火事でみんなきれいに焼けてしまいました。これは放火だというのがわかっているのです。

何で放火だってわかるのかって、新聞記事に載っていますし、大体、風の強い日に材木屋の倉庫から火が出るのです。本当は湊町エリアだけ焼ければと思っていたのが、汐入エリアまで焼けてきました。火事はなかなか意のままになりません。この辺に士官学校がありましたし、それから職工学校がありました。重要な海軍の施設がここにあったのです。それは大変だということで、兵隊さんが出てきて、「消せ、消せ」とあわてて消したのです。左側はちょうどここに山が出っ張っていて、山の後ろ側にJR横須賀駅ができるのですが、ここまでは完全に燃えてしまって、燃えてしまったら、ここは海軍のものだということになってしまいました。ですから、湊町の繁栄がなくなってしまったのです。

職工さん、それから技術者の人たちが大挙して、呉と佐世保へ行ってしまいました。ですから一気に、十数軒あった旅館がわずか2軒になってしまったという寂しい状況が、この中で生まれてきました。

実際に明治27年、28年のときに清国との戦いがありました。その戦いは、特に海戦で勝ちました。日本を

一番脅かしていた清国の戦艦に「鎮遠」という船があって、フランス製の船だったのですが、その「鎮遠」という船を戦利品として取りました。

その戦利品に取った船を、何とかしてみんなに「俺、清国を負かしたから、これを取ってきたぞ」というのをやりたいというのがあって、何と明治28年8月5日から5日間、横須賀でこの「鎮遠」を展示しました。これを見てもわかりますように、船はみんなこういうふうに沖に泊まっていまして、栈橋につけるわけではないのです。実はこの前の日に皇室の方が来て見学し、翌日から一般開放しました。この5日間にこの横須賀を訪れた人は19万5,000人、この時代で19万5,000人の人が、この一杯の船を見るために駆けつけるわけです。

それも真夏でしたから、凍死することはないので、どこでもいから寝てしまうのです。ですから、商店という商店は、店が閉まると、棚と棚の間にみんな人が寝ていました。「俺、ここで今日、ちょっと夜だけ寝かせて」というのがいっぱい来て、商店のほうは、寝かしちゃったのはいいけど、物を取られてはいけないので、寝るにも寝られないという状態でいたということです。

やはり横須賀というのは、こういうのをみると海軍の街だなというのがわかりますね。船を見せるといったら19万5,000人の人たちがここへ来て、横須賀のつかの間のにぎわいを見せたわけです。

しかし、なかなか経済的には立ち直りませんでした。先ほど言いましたように、湊町の火事があった後に、もう一つ明治23年11月に大きな火事がありまして、それは中心市街地を焼いたのです。そうしたら、この街に来ている人たちというのは、横須賀は儲かるから横須賀に行って商売しようという商人が多くかったので、実際に横須賀で根を生やして商売しようかなんて思っている人はあまりいませんでした。横須賀で、うまく

できるのだったらそれはそれなりにやればいかなど  
いうふうに思っているぐらいの程度だったわけです。

ですから、この商人の人たちも焼け出されたら、  
「ああ、もう横須賀はだめだ」と。海軍の中で商売で  
できるのかなと思ったら、海軍相手の商売はできないと  
いうことがわかってきたわけです。海軍の中に物を納  
めるということは、みんな海軍省というところで決め  
て、ここで商売できるのはほんの一部のわずかな人  
で、ほとんどの人たちは、「何だ、俺たち、幾ら頑張  
っても」と、そんな頑張りも見せないのです。「おい、  
隣の肉屋、俺と手を組んでやらないか。」「こっちの  
肉屋と手を組んで、ここへ納める運動をしないか」と  
いっても「いいよ、俺は」といって断るのです。私も  
商人なのでわかるのですが、商人というのは自分が一  
番になりたいものなのです。小商人でやっているから、  
火事で焼け出されたら、「もう、今日明日にも見切り  
をつけよう」それからまた「できたらまた来ればいい  
よ」ってどこかへ行ってしまふ。その間は行商してい  
るなんていうことが、頻繁に行われていました。

これは、火事から立ち直ったときの元町から旭町を  
みたところで、今、ドブ板通りと呼ばれるところの写  
真ですけれども、もう電線が引いてありますね。特に  
海軍だったので、交通と通信のインフラは早いです。



これは、昭和になりましてからの軍港堂さんという、  
ベースの目の前にありました本屋さんです。



ここでは、海軍のいろいろな本や参考書を売ってい  
ました。やはり海軍というのは勉強しないと上に上が  
れないので、常に勉強するための参考書をたくさん売  
っていました。

ここは若松エリアですけれども、これ、先ほど言い  
ましたように、明治11年ごろに埋め立てが終わりました。  
明治11年にここの平坂が開通しました。平坂が開  
通して、ようやく平坂の上、中里まで、山道を通らな  
いで行かれたのです。この山道を通っていくのを浦賀  
道と呼んでいました。



今でも汐入小学校の脇、それから諏訪町の諏訪神社  
の脇から上がって、緑ヶ丘を通って、中央駅の裏を通  
るのを浦賀道と呼んでいますけれども、この時代には、  
下の通りの雑踏の中で、いろいろな人に会わないよう  
にこの山道を通って行ってよかったのは「小松」とい  
う料亭です。小松さんは、今の聖徳寺坂の下に、赤門  
という永島家というのがありますけれども、あの前で



商売を始めました。それでさらに小松さんが成功したのは、行くとすぐに「お疲れさまです」と言って、軍服を脱がしてくれて、「お風呂へどうぞ」と言って、それで浴衣を着せてくれました。それから一杯お酒を飲む、お魚を食べる。芸者さんが入るとなると、どうしても左が上がりてしまう。「左が上がる」というのは、これは、「のみ」（鑿）を持つ手なんです。大工さんでも、それから金山で石を掘る人たちも、みんな「のみ」を持つのは左手なんです。だから左利きのことを「のみ手」といいます。左が上がり過ぎるといけないぞというのは、左手で飲んでばかりいてはいけないということなのです。夜遅くなると、小松さんは「あなた、明日の仕事があるでしょう。この辺で」とうまく抑えてくれて、帰してくれたのです。

官舎がこの辺にありましたから、また山道を帰って戻っていきます。海軍の軍人さんですから人に襲われるようなこともなく「あいつ、また行ったよ」なんてあまり言われることもない、こういう道がありました。

大滝・若松エリアについてですが、会津藩が鴨居に陣屋を構えた時に、会津藩に入る品物を全てこの若松屋さんを通していらしいです。本来は若松屋さんといっていらないらしいのですが、「おまえのところは、うちの特別な店だから」ということで「若松屋を名乗れ」と言われて若松屋と名乗るようになりました。そういった経緯で大もうけしたお金で、この部分を若松屋さんが個人で埋め立てたものですから、若松町というのです。若松屋さんは、鴨居からここまで人の土地を通らないで来られたという、そのぐらいのお金持ちになったということです。

明治36年になりますと、海軍工廠に変わります。今でも昭和の初めの工廠の建物が残っております。実は、ここでは、船を造ったりエンジンの整備をしたりすることはできましたが、大砲を造ることはできませ

んでした。その大砲を造ったり、それから魚雷というのを積んだり、それから海の地雷といわれる水雷というのを入れたり、そういうことをやらなければいけなくなってきました。しかし、そういう施設がこのエリアにはもう狭くてできなくなってしまったのです。

これをどうしたかといいますと、こちら側、これが長浦の港で、田浦というところにつくったわけです。船を造るところは造船、それからエンジンを造ったり、エンジンを直したりするところが造機、それで兵器を造るところが造兵といって、実際に工廠になると、造船、造機、造兵部門の全部が一緒になりました。

実はここでちょっと面倒なことが起きました。この上、若松町から平坂上は、豊島といいます。豊島町へ行きますと広がるので、たくさんの人が住んでいるのはわかっているのですけれども、豊島町と横須賀町の境がよくわかりませんでした。しかし、町は三つに分かれていて、自治体が三つあるので、何かここでというと、「すみません。豊島町、こういうことです」「横須賀町、こういうことです」「田浦町、こういうことです」となり、海軍としてはこれを一つにできないものかと年中思っていたことなのです。

昭和8年4月1日を待たないと、これが全部まとまらないのですけれども、三つのエリアができていました。

田浦エリア、これは船越を中心としたエリアで、現在、造兵の機械、機関銃をつくっていた工場が残っていて、このフォーラムの主催、よこすか都市景観協議会の会員の東芝ライテックさんが使っています。

それから、豊島町はどちらかというと住宅地で、海軍さんの住宅地が増えていった場所になります。海軍としては、この三つのエリアを全部統括しないと面倒だな、と思っていたのです。

もう一つ、横須賀は人口が増えてきて、ここにもた

くさんの若い青年将校が来るわけです。海軍の方も青年将校のためにお見合いをさせたいと考えました。青年将校の中には、海軍の将校さん、最もトップになりますと、海軍大将になってしまうかもしれないような人たちがいますから、もし海軍大将になるような人たちの奥さんとなると、それなりの教養、理性が必要となります。そういう女の人たちを何とか教育できないかというのは、海軍さんからの切実な願いとして出てきました。横須賀町というのはずっと貧乏なんです。ほんのちょっとだけいいときもありましたが、本当にずうっと貧乏なんです。何もこんなに、力を込めて言うことはないのですけれども。

海軍さんにそう言われたけれども、どうしようということで、比較的、一次産業が発達していたこの豊島町に相談しました。豊島町は公郷まで入っていますから、一次産業、農業・漁業などが発達していました。だから土地をたくさん持っていて、衣笠に近いところに枇杷山なんていうのがありましたけれども、海軍をやめてからビワの木を植えて農業をしたりして、一次産業がどんどん発展してきました。比較的この辺りは、お金持ちで豊かな生活をしている人がいたわけです。

海軍は、先ほど言いました将校から上というのは、ここに所属するのは、命令されてくる時だけでした。あとは、下からずっとたたき上げて、将校になった人、それから下士官と言われている人、陸軍でいうと軍曹、鬼軍曹と言われるような人たち、それから水兵さんは、全て横須賀から動かないのです。この中の異動はあるのですけれども、横須賀市役所に入ったなら、横須賀市役所から出ないのと同じで、兵隊さんなんかはみんなそうなのです。将校というのは、例えば横須賀市役所でいうと、部長さんから上は全部外から引っ張ってきて、次の日はどこへ行っちゃかわからないのです。

だけど、何とかそれを横須賀へつなぎとめるために、横須賀からお嫁さんをもらえば、海軍の街として、もっとよくなるだろうという、これは海軍省の考え方も一致しましたが、横須賀はそのお金がなくて、どうしよう、どうしようとずっと思っていました。

そこで相談したのが隣の豊島町なんです。平坂のところから、どこまでが若松町で、どこからが中里、今は上町と明確になっていますが、当時はこれを正確に言える人なんて、あそこに住んでいる人でなければ言えないような状況でした。

その当時の郵便物なんていい加減ですから、「横須賀町中里」で届いちゃうわけです。「三浦郡横須賀町中里」で出しても、郵便屋さんは気がきくから配達はしてくれていました。

これ、さまざまな問題が輻輳していますが、豊島町と横須賀町との話し合いで女学校を共同でつくるのはどうだということになりました。その前までは、豊島町は絶対に横須賀町と話ほしなないと言っていたのです。

なぜかという、横須賀町は貧乏なくせに、たくさん繁華街を持っていましたから、みんな買い物に行くのです。そうすると、どうしたって横須賀町のほうが何かすぐれているように思うでしょう。「何だ、田舎者が来たのか」「都会には田舎には売っていないこういういいものがあるから、売ってやるか」といったように、お金だけ出させられて田舎者扱いされたら嫌だ、ばかにされるのではないか、そういうような思いもあって、話し合いの席につかなかったのです。それから、あまり異動のない技術職の人たちが豊島の辺りに住んでいましたから、あの人のところに横浜で寄宿舍生活しているお嬢さんがいるのだったら、横須賀にもそういうものをつくったらどうかと考え、話し合いの席についたのです。その話はとんとん拍子でまとまりまして、明治38年には、実業女学校ができました。

実はこのところに女学校があるのです。ここにずっと石段があって、このところに女学校と書いてあります。これが、横須賀学校の中にできました女学校です。



北村包直(かねなお)さんという37歳くらいで校長さんになった方がいました。包直さんというこの人は、三浦一族の大研究者で、三浦一族のことは、まだこの人の資料に頼っている部分があるのですけれども、校長になったのです。

この女学校、38年には、実業女学校として認可されたのですけれども、翌年には横須賀高等女学校になりました。これも両方でお金を出して組合をつくったので、横須賀豊島組合立の女学校ということになったのです。

お金を出したのだったら当然、うちのほうの生徒も必ず何人か入れてもらわなければ困るという話が出てきて、「ああ、そんな面倒な話をするんだったら、一緒になろうか」と言って、明治40年2月、組合立の高等女学校になって10カ月後に、横須賀町と豊島町が横須賀市になることを決めました。もちろん県のあっせんもありましたけれども、海軍の後押しもあり、ここで初めて横須賀市というのができました。

ですからこの時に、現在の逸見から南側、現在でいいますと三春町のエリアまで、それから公郷と言われている、平作川を越えないエリアまでを横須賀市とし

て、市になりました。

神奈川県で2番目に市になったのです。全国でもかなり早いです。この高等女学校だって、全国で300校ない時代にできているのです。まだこのときには第四中学校、横須賀高校はできていないのです。だから横須賀高校よりも、この女学校のほうが早いのです。

でもこの校舎、間借りをしていましたので、明治40年に現在の上町の青少年会館のところに学校が移ってきて、震災までずっと続いていました。震災のときに、校舎はつぶれなかったのですけれども、ちょっと傾き、それを直すのに、やはり横須賀にはお金がありませんでした。

横須賀市の人口の状態、今年はワースト2で、何でもナンバーワンの座を明け渡したのかと怒ったのですけれども、横須賀の伸び代って、明治12年から明治40年までで2倍ぐらいしか増えていないのです。

では、この中里はといたら、中里の伸び代は34倍、だから明治12年から40年まで28年間、約30年間で34倍に増えています。深田は30倍に増えています。不入斗・佐野でも18倍、ですから10倍を超える勢いで、外側のエリアが膨らんできたわけです。そのぐらい伸び代があったところが、横須賀と一緒にしてくれたのです。

またさらに追い打ちをかけて、明治42年に大滝・若松町がまた火事で焼けます。横須賀は、本当に火事が多いのですけれども、ここが600戸焼けてしまいました。このときは、横須賀市もさすがに「これは大変だ。この間みたいに出ていかれちゃうと困るから」ということで、市営の借家を検討したのです。検討したのですけれども、これも資金がなくて頓挫しました。

これからの横須賀市、これではいけないということで明治42年に初めての横須賀市の総合プラン、市をどういうふうにしていったらいいかという総合計画ができ



まして、学事・観光というのが第一部会、防災・福祉・衛生というのが第二部会、商業・交通・情報インフラというのが第三部会という形ができてきました。

こんなふうな形でやってきたのですが、何もうまく結びつかないうちに、時代がどんどん変わっていきます。

これ、その当時の震災前の平坂です。この時代、ここには押し屋さんというのがいて、荷車が来ると、中央の駅前から平坂の上まで押しました。



駄賃をもらおうとまた下へ下がってきて、また押していくという、そういう商売をしていた人がいました。この右側の、上に望楼がある建物、これは横須賀警察署です。平坂の途中にありました。この警察署は震災の時につぶれなかったのですけれども、ちょっと傷んだので、去年までありました場所に昭和4年に移っていきました。

この前は、警察は元町にあったのです。元町がどんどん繁華街になって広がってくるに従って、警察がそこにあるよりはというので、ここに移ってきました。

この写真は震災後の若松町のものです。

震災があってから変わりました。横須賀の街が本当に変わるのは震災後でして、これ、ちょうど今の中央の駅前です。



この道路は、幅15間あります。JR横須賀駅から平坂下まで15間道路をつかったのです。これが横須賀のまちづくりの本当の始まりです。

何でそんな15間道路をつかったのかというと、震災の時に、ここが全部焼けたことで、海軍さんは、この火がひよっとしたら、海軍工廠に入るのではないかと思ったんです。海軍工廠、鎮守府のほうに入られたら困るぞというので、幅が15間、27メートルもある道路を作れば、防火帯になると考えました。

まだまだ消防の力が弱いですから、建物を壊して消火する破壊消火をしていけばそれでも大丈夫だという形でようやく横須賀の本当のプランができてきました。



つぶれてしまったここらの人たちはどうしたかというと、避難者住宅、仮設住宅に行きました。その仮設住宅というのは現在の安浦、今、県立大学とっている土地が明治の終わりに埋め立てが終わりまして、地

盤が沈下したりするからすぐに建物を建ててはだめだよということで、10年間放っておいている間に関東大震災が起こったので、そこに仮設住宅をつくったのです。

海軍はさらに、この楠ヶ浦、稲岡、現在の歯科大ですとか横須賀学院のあるあのエリアを何とかしようとしました。そこに住んでいた人がいたのですけれども、海軍があちらこちらに飛び地で持っていたものをこのエリアに全部まとめ、海軍の用地にしてしまいました。



その海軍の用地、6万5,500坪、稲岡と楠ヶ浦を合わせて3万8,800坪、その移転料で海軍が示したお金が137万円、でも実際に評価や、移転、その賠償金とかかかったら、225万円かかりました。87万円余りも損失が出たのです。海軍省は何もしてくれないのです。

先ほどの15間道路が必要だといった時には、「よし、じゃ、その分だけ払うよ」といって神奈川県が45万円負担してくれました。あと42万円は横須賀市が負担しました。横須賀市のこの時の1年間の予算は、総額327万円で、327万円のうちの42万円というと、これはものすごい大きさです。こういうことを横須賀市は平気でやってきました。だから、結局、横須賀というのはなかなか裕福な街になれませんでした。

これ、さいか屋さんです。「横須賀雑賀屋」と書いてありまして、大滝町にできました。大滝町にできま

したさいか屋さんは、3階建てで、昭和9年には4階建ての鉄筋のビルになります。



さいか屋さんは、最初はベースのそばにあったのですが、ガントリークレーンができるからといって反対側に移されて、その時に、ちょっといざこざがありました。海軍に対して、その金額はないだろうと言ったのです。横須賀は何も言わないで、42万円のお金を負担しましたけれども、さいか屋さんはその時にごねて、ごねまくりました。結局、関東大震災が終わって、建物がみんなつぶれてしまった時に、そのときにごねて頑張った9軒は、この周辺に土地をもらって成功したのです。さいか屋さんと隣のフジワラさんだけが、ここに残りました。

そんなことがあって、横須賀は海軍に泣かされてきた歴史があります。海上自衛隊にはあまり泣かされていないようですが、海軍には泣かされてきました。この歴史をどのようにするかというのが、私たちのこれからの課題になると思います。

相変わらず海軍と同じような経過をとっていますので、そのことを踏まえながら、国との付き合い方をうまく考えないと、横須賀のまちづくりはうまくできないぞということが、私の締めの言葉でございます。

ありがとうございました。(拍手)

## パネルディスカッション

『伝えよう未来へ ～近代遺産のまち～』



[コーディネーター]

井田邦明さん／舞台演出家、ミラノ・アルセナーレ  
劇場・演劇学校主宰

[パネリスト]

久保木 実さん／地域史研究家、郷土史家、三浦半島  
の文化を考える会代表

越川昌光さん／ドブ板通り商店街振興組合理事長

山本詔一さん／郷土史家、横須賀市近代歴史遺産活用  
事業推進協議会会長

○司会者 それでは、これよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

舞台左手から順番に、ご紹介をさせていただきます。

このパネルディスカッションのコーディネーターを務めていただきます、井田 邦明様です。

横浜の伊勢佐木曙町ご出身で、お隣が大関・若羽黒、向い側が美空ひばりの生家の営む魚屋さんであったそうです。

東京の大学で演劇科をご卒業後、「安部公房スタジオ」に所属されました。その頃は、俳優の仲代達矢さんや田中邦衛さんも所属されていたそうです。

幼い頃から「海の向こうに何があるか」ということに大変興味を持っておられ、23歳の時に、横浜港からナホトカ航路でフランスに渡り、世界的に有名な演劇学校「ジャック・ルコック国際演劇学校」に留学されました。

ご卒業後は活動場所をイタリア・ミラノに移し、造船所という意味のアルセナーレ劇場及び劇団、学校を主宰されていらっしゃいます。

また、ミラノ工科大学と、建築のワークショップなどもコラボレーションされていらっしゃるそうです。

イタリアのみならず、欧州各国や日本の舞台演出で活躍されており、よこすか芸術劇場のこけら落とし公演では、オペラ「蝶々夫人」の演出をされ、昨年10月にはミラノのドゥオモの聖堂内で、歴史的に初めてオペラ「オルフェオ」公演を演出されました。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

続きまして、パネラーの方々のご紹介です。

先ほど講演をしていただきました、郷土史家で横須賀市近代歴史遺産活用事業推進協議会会長の山本 詔一様です。

横須賀の西浦賀にお住まいで、江戸時代から続く家業の書店を経営されていらっしゃいます。



本日お配りのパンフレットに記載しております、横須賀市近代歴史遺産活用事業推進協議会会長の他に、横須賀市文化振興審議会委員、横須賀開国史研究会会長など、多くの肩書きをお持ちでいらっしゃいます。

ペリー来航後の三浦半島の街の形成や、人々の暮らしがどのように近代化されていくのかにご興味を持ち、独学で学ばれたそうです。

講演会や勉強会の講師、コラムや連載執筆など、山本様のお名前を見ない日はないのではないのでしょうか。

昨年の横須賀製鉄所（造船所）創設 150 周年記念事業では、市内各所に飛び回っていらっしゃって、前回の景観フォーラムでも基調講演とパネルディスカッションにご出演いただきました。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。

次に、地域史研究家、郷土史家、三浦半島の文化を考える会代表の久保木 実様です。

大学をご卒業後、横須賀市内の小学校にご勤務されました。

在職中より、社会科学習に活用することを目的に、横須賀の郷土史に関する絵葉書や古地図などを収集され、社会科の研究発表に資料提供を行うとともに、研究校の助言指導を行っていらっしゃいました。

横須賀市根岸小学校校長を最後に定年退職され、現在は、三浦半島の文化を考える会の代表として活躍されています。

近年、文化会館や、さいか屋横須賀店で行われた、近代歴史遺産活用事業特別展示へ多数の資料を提供され、監修をされました。

パネルディスカッションでこれからスクリーンに映し出される写真などは全て久保木様所蔵の資料です。また、ホール後方に提示されている資料も久保木様よりご提供いただいたものが多数ございます。

どうぞよろしくお願いいたします。

次に、ドブ板通り商店街振興組合理事長の越川 昌光様です。

汐入駅どぶ板通りの入口に位置する、60 年以上続く双葉貸衣裳店を運営されています。

昨年春、米海軍横須賀基地前にある、通称「どぶ板通り商店街」の「横須賀市本町商店会」が、「ドブ板通り商店街振興組合」と名称を変えられました。

その初代理事長となられた越川様ですが、外国人が日常的に歩き、異国情緒あふれる、全国区の「どぶ板」という名称を正式に掲げて、たくさんの方々に足を運んでいただけるよう商店会員の皆様と共に頑張っています。

戦後、アメリカ軍が進駐し、ベトナム戦争や朝鮮戦争終結後、人通りがぱったり途絶えた商店街再生のために、越川様をはじめとする当時の青年達が 3 5 年前より始めたドブ板バザールは、「継続は力なり」で、この 2 月で 130 回目の開催だそうです。

また、フラッグコンテストなどのイベントも定期的に開催し、「アメリカの風薫る街」として、商店街の活性化に向け大変な努力をされています。

どうぞよろしくお願いいたします。

以上 3 名のパネリストのみなさんです。

本日のディスカッションのテーマは「伝えよう未来へ～近代遺産のまち～」です。ここからは、井田様にお任せしたいと思います。よろしくお願いいたします。  
○井田氏 イタリアのミラノに 40 年ぐらいい住んでいる者なのですが、一昨日帰ってきたばかりです。僕はオペラの演出なんかもやっているのですが、横須賀の都市と縁があり、よこすか芸術劇場でオペラ「蝶々さん」を演出させていただきました。「蝶々さん」というオペラは、日本人がアメリカ人をずっと待っていて、のちに自殺するという話のオペラなのですが、横須賀の街もアメリカの文化に対して縁が

あるし、僕は横浜の生まれですけども、横須賀という街も横浜同様、外に開かれている街という特質があると思います。

今井さんの富岡製糸場や山本さんのお話を聞いて、歴史のあり方、日本の第一の開国、幕末、明治、それから第二の開国と言われる終戦、その時に横須賀も大きく変わっていったと思います。久保木さん、そういった観点から横須賀の街並みの歴史を写真とともに説明していただけますか。

○久保木氏 これが、横須賀の原点である横須賀製鉄所の明治8年ごろの様子を写したものです。



奥の方が、元町といって、本町の司令部が、もうちょっと左側になるのですかね。この辺りずっと山がありまして、その山を開いて、製鉄所の埋め立てをして、造成して建物がつくられた。

富岡製糸場が世界遺産になりましたけれども、この製鉄所の中のドックなどは、世界遺産になっても不思議ではないです。本来、世界遺産になって当然という場所なのです。

これが日本に残っていますが、現在も使われているために世界遺産に指定されないということで、もしここが米軍基地から開放されるということになったら、横須賀にとってはものすごい経済効果が起こるのではないかと思います。

ただ、現在、現役であることが大きなネックになっていると思います。

左側の真ん中辺りが、製鉄所をつくるためのフランス人の居住地、左奥の白い建物の奥が今の司令部、

鎮守府です。左側の切り妻の建物が、教会です。そして左手前が集会所、真ん中が門になります。ここから入って行くということです。

奥の長い建物が270メートルあったロープ工場、製綱所です。270メートル、非常に長いです。右端あたりに時計台があります。

製綱所の奥がヴェルニーの官舎になります。サヴァテュエの病院が、西洋的な医術を村人にも施したとされています。中央の山が向山行在所。ヴェルニーの官舎の丘が切り取られて、今、国道16号線の道路になっているという形になります。

ですから右側が汐入のほうですね。左側が元町というところです。

先ほど、富岡製糸場についてのお話がありましたが、中央右側の建物にある屋根の小屋組みのトラス、これが富岡の建物に導入されていく骨組みの原型が、非常によくわかる写真だということです。

真ん中のレンガ造の建物は、移出とか出入りする人たちが検査を受けて外に出るという待機場所になっていたそうです。



この鳥居が今、ドブ板のところにある延命地蔵がありますが、最初はこの写真の場所にあって、震災後にドブ板に移ったものです。この写真では、もともとは汐入小学校のあたりにあったことを示しています。

左側奥が今、芸術劇場があって、その前にあるUR

のマンションの辺りが写真右奥の方という形になります。ここはもともと汐留新田とか汐入の田園地帯で、田んぼや湿地帯があったところで、この写真ではそういう名残があります。

奥の真ん中の建物は職人<sup>こうしや</sup>覺舎<sup>かくしゃ</sup>とあって、現場で働く人たちが技術を学ぶ場所でした。覺舎は高等技術者が学ぶ場所で、東京大学の工学部のような、そういう専門的な学習をしていました。

真ん中寄り右側の建物の奥に時計台が見えています。ちょっと皆さんには見にくいかもしれませんが。ここに横浜・横須賀の渡船の乗船所がありました。ここは、江戸時代に金沢（野島）と横須賀を結ぶ和船の渡船が通っていたのです。ですから、江戸時代の横須賀の港は、水上交通の中心で、ここから江戸に薪や魚を盛んに輸送していました。そういうところだったのです。それが、製鉄所ができることによって、日本の近代産業の原点に横須賀がなっていきました。

○井田氏 僕はイタリアで生活していることもあり、さっき今井さんがおっしゃった建物の煉瓦の積み方や、洋館のつくり方なんて、すごくおもしろいと思います。

フランスの人が移り住んできたからでしょうか、戦後のアメリカの文化とはまたちょっと違った感じです。時計があるというのも、またおもしろいと思います。

その当時、日本の人は、時計は初めてだったのではないのでしょうか。

○山本氏 一応、今のところは日本で最初の時計台と言われているものがあります。横須賀製鉄所を表した写真の外れにあるものです。先ほどの教会はヴェルニーさんが来る時に造られたものです。彼は敬虔なクリスチャンだったので、教会があることが来日の条件でした。そのことがあり、修道士さんや司教さんもいるすばらしい教会ができました。明治の初めにここを訪れたイギリスの貴族、ボーヴォワールという人が「日

本にフランスの村ができた」と手記を書いているほど、この内部はフランス風だったらしいです。

現在でもこの周辺の一部分は、米海軍の課長さんより上の人たちの住宅になっています。中へ入ったことがないですから、あまりわかりませんが、日本的ではないちょっとおもしろい場所がこの辺りです。○久保木氏 これは汐入駅です。昭和20年代半ば頃です。



久保木実氏提供

女性の服装もその頃のもですね。右側が売店になっていて、米軍の方が商品を見ている。奥は、以前に、汐入書房というのがあって、現在は整骨院になっている場所です。



久保木実氏提供

これは、先程の写真の隣になりまして、太平堂洋品店です。戦後すぐに、アメリカ文化がクリスマスの飾りという形で入ってきています。



これは貸し自転車です。貧しい時代ですから、こういう自転車に乗って回るといふことで、アメリカ兵が主に使ったのですかね。



久保木実氏提供

勤労会館は今の汐入駅前のところがありました。右側の脇です。

これは、東京絹織工場ですかね。東京靴下の工場と、今のダイエーから総合福祉会館の辺りです。



久保木実氏提供

この道路が国道16号線で、左側が駅の方になるといふことです。

横須賀でもキャバレー文化が華やかな時代がありました。これはヨゼフ病院の下のところにあったオリンピックというキャバレーです。

この辺りのことは後で越川さんに、戦後のドブ板を含めたアメリカナイズされた横須賀市街のお話をさせていただけるといふ思います。



久保木実氏提供

次、お願いします。



久保木実氏提供

左側がオリエンタルアーケードという建物です。いわゆる、スーベニアといふアメリカ兵向けのお土産の店が、ドブ板に入る辺りからたくさん並んでいました。これが、アメリカ文化が入ってきている時代を象徴する建物で、奥の方にガントリークレーンがあります。現在の場所に置き換えると、右側奥の工場付近が、URのマンションで総合福祉会館の辺りの位置です。

では次、越川さんお願いします。



久保木実氏提供

○越川氏 左側の水色の建物、そこは天國って言って、今の大河原さんがやっている魚藍亭さんってお店の前身です。その向こう側が、現在のドブ板商店街、昔の本町商店街の商店界限です。

○久保木氏 これは昭和21年ごろのドブ板の入り口ではないかと思うのですが、右端辺りでは路上に物を並べて売っています。



久保木実氏提供

左側でも、人が群れている箇所がありますが、戦争で疲弊した人たちがこういうところで商売を始める、そういった雰囲気です。

通りの左奥の建物は、ちょっとよく分からないのですが、横浜興信銀行、今の横浜銀行の前身があったのではないかと思います。

次、お願いします。



久保木実氏提供

道路が交差している左側が今の京浜急行の横須賀中央駅ですから、中心辺りがYデッキと考えるといいかと思います。右下の端に鳥居がありますから、ここは諏訪神社です。そしてこれが電気館で、後に、あまりよくない映画を上映していたところです。よくこの写

真をご覧になると、瓦屋根の旧来の商家の建物がずっと並んでいます。

こちらが震災後です。



このように建物が四角くなります。要するに、震災で瓦屋根の二階建の家ってほとんどつぶれちゃったらしいのです。震災後は、箱形の丈夫な耐震性の強い屋根を持つような建物に変わってきます。これ(1)がさいか屋です。これが(矢印②)郵便局です。この辺(3)に東宝と松竹、今はなくなってしまいましたけど。

次、お願いします。



これは戦後です。同じように、左下端に鳥居、諏訪神社がありますので、非常にわかりやすいです。

これ(4)が大きくなったさいか屋です。これ(5)が郵便局、これ(6)が市役所です。これ(7)が今、移設しています警察署ですかね。これ(8)が司令部です。

次の写真が国道16号線になります。当時は16号とはもちろん言いませんが、右の建物がいわゆる横浜銀行の前身、第二銀行、後に横浜興信銀行、そして横浜銀行というふうに変っていききました。





ここがいわゆる16号の通りですが、非常に狭いですよね。次が震災後です。



同じ場所で第二銀行といわれていました。

震災によって街が壊滅して、新しい都市計画で広い道路になり、モータリゼーションの社会に対応できるような街に生まれ変わったということです。同じところに同じ銀行の建物があるので、非常に比較がしやすい写真となっています。

では震災の方の写真に戻ります。



横須賀は震災で完全に壊滅しました。これが旭町という現在の小川町で、奥が小川港です。左側の方が、機関学校で、今でいうと歯科大とか横須賀港です。

これが、良長院です。



鎮守府の方から見ていますので、こちらの旭町と山王町が焼け野原になりました。現在平安閣があるところで火を食い止めて、諏訪町と元町の方は燃えませんでした。ですからこの山のところから全て燃えてしまったということです。

これは、諏訪公園の方から見ていますので、右の丘の下の方が山王町で、海に向かって大滝町の方になります。



ということで、下町のほとんど全てと中心街は焼け野原になり、この時代の横須賀は全て消え、新しい街へとなくなっていました。

次がドブ板通りです。先ほどのドブ板の写真と比べてみると、いわゆる古くからあるドブ板商店街が、戦後、先ほどの写真のように、アメリカナイズされたものに面影を変えていくということがおわかりになると



思います。



これが旭町の方のドブ板通りです。



同じように大きな商店が並んでいるのが比較してみると非常によくわかります。

○井田氏 僕もドブ板通りを歩いて、すごくおもしろいと思いました。僕はほとんど日本にいないものから、外国人の目からというか、また違った見方ができると思います。最近では、日本に帰ってきて新潟や他都市に行った際、駅を降りると駅ビルがあり、東京などの都会でもまた同じように駅ビルがあって、どこの街に行っても似たような顔しか見えないと感じました。

ところがドブ板通りを歩くと、個性的な、何かちょっと違った、ちょっと怖いような、きな臭いような、横須賀の独特な雰囲気を感じました。それは、やはり横須賀が持っている、独特な顔だと思うのです。そういうものをうまくアピールできたら、外国人も来るだろうし、日本人の観光客も「こんなものが横須賀にあ

るのか」と感じるのではないのでしょうか。先ほど久保木先生が、日本の街というのは木材で造られたので、全部震災で壊れて新たに街を造りあげたとお話しになりました。イタリアなどは建物が石で造ってあるので、歴史的なものが現存しています。古いものを未来に向けて積み重ねるような、そういう街づくりを行なっています。そういう意味では、イタリアという国では、街を歩いていると、どんな小さい都市に行っても懐かしいと感じるような美しい街づくりを行なっています。

そのようなこともあり、イタリア人は、「国」という意識より、「俺はボローニャ生まれだよ」といったような、自分が生まれ育った都市に対する愛情を元に、自分のアイデンティティーというものを持っています。要するに、最近の日本によく見られるような同じような顔をした平均的なものではなくて、ぜひ「俺は横須賀生まれだよ」と誇れるような、横須賀の何か独特なものをうまく育ててくれたら嬉しいと思います。

ドブ板通りの歴史について、またちょっとお話をさせていただけますか。

○越川氏 私は戦後生まれですから、戦前の話は久保木さんをお願いしたいと思います。

とにかくドブ板通りというのは、米軍に接收された後、大変ひどかった時代がありました。ベトナム戦争、朝鮮動乱終結までは、船が入ってくると、とにかくドブ板というのはにぎわいました。その当時はいい思いをいっぱいしました。私は若かったので、いい思いはしませんでした。

その動乱終結後、全くドブ板に人が来なくなったのです。そういう中で我々のような若い連中が街を何とかしようということで活動し、今現在あるのです。先ほどこの開会の前に、久保木さんや山本さん、井田さん、今井さんとお会いしまして、やはりドブ板というのは、これからも街として活性化を図るために努力し

なければならぬし、4人とお話しすることは、私にとって大変重荷になりました。

それが重荷とならないように、今後、私は後継者につなぐため、他の商店街にないようなドブ板の商店街づくりをしていこうと思っているのです。

ひとつは、国道16号線を挟んで向こう側は米軍基地ですから、アメリカに最も近い商店街ということで、それを逆手にとって、市内の人はもちろん、市外、県外からも足を運んでもらえる商店街を目指します。

○井田氏 横浜でも、観光というと中華街などありますよね。今、元町とか、伊勢佐木町の方はもう完全にだめになっているみたいです。野毛のほうも客足が遠のいているみたいです。

なぜかという、やはりこれは、建築家の都市景観、都市構造というのですか。都市計画が日本ではなかなか難しいのではないかと思います。ヨーロッパの都市計画を考えると、まず広場というのが中心にあります。それから先ほどフランスの方が教会をつくってくれと言ったお話がありましたけれど、教会という、精神的なよりどころをつくります。その教会の前に広場をつくります。すると、広場から商店街やアーケードが続き、それから少し遠くに住宅ができる。ヨーロッパではそういう都市構造になっているものが多いのですけれども、日本は、そういうふうにはならないと思うのです。日本にも神社などはありますが、そういった神聖なものは山の上のひそかなところにあります。庶民たちの生活はどうかというと、道の通り、商店街という、そういう通りに沿って、商売をやりながら住んでいる。そこでまたいろいろなものをつくるという、日本の家のあり方はそういった構造をしていると思うのです。それが日本の文化の構造だと思うのです。

だから、近代、西洋のまねをしなればいけないといった気持ちが高まっていた時代、大阪万博などが

「広場、広場」といって造っていったと思うのですが、やはり日本の文化とちょっと合わないものを当て込むような都市計画は、日本人の精神、気持ちはずさんになって、おもしろくないような人も生まれてくるのではないかと思います。



都市というのは、人間の体と同じで有機的なものだと思うので、都市が健康であれば、例えばドブ板通りのようなちょっと危ない雰囲気のある場所があったり、それから健康的な海が見える場所があったり、いろいろな雰囲気をもった場所があるごさごさした街が、おもしろいと思うのです。

それを一面的に整理して、決めつけたひとつの計画で進めると、つまらない都市しかできないと思うので、本当にこれからドブ板通りというのは、横須賀の顔になると思います。

○越川氏 ありがとうございます。

○井田氏 きれいになり過ぎてはつまらないと思うのです。

○越川氏 実は、山本さんも私も、行政のほうに言いたかったことがあります。私の商店街で街路灯を新たに直したのですが、色について行政から横須賀市の景観条例にはそぐわないということでいちゃもんがつかれました。

市は、防犯灯、街路灯含めて、全く暗い、ブラウンの濃い色の系統を推奨しているのです。うちの場合、

市の景観条例ができる以前から、防犯灯、街路灯が、スカイブルーみたいな感じで使っているものですから、それを通そうと思ったら、市のほうからいちゃもんがつきまして、さんざん話をしました。

最終的には、通ったのですが、今、井田さんが言われたように、やはり個性とか、そういったものが都市にもないとまずいと思うのです。その辺、山本さんはどう思われますか。

○山本氏 私は今、井田さんが言われたように、都市というのはやはり人間と同じで、表の顔もあれば、裏の顔もあったり、人には見せたくないところもあったり、ここは大いに表現したいというところもあるのが、都市だと思うのです。

それが日本中どこへ行っても、みんな同じ顔になってしまうのはまずいかなと思います。私ども、横須賀で育った人は多分わかると思いますけれども、ドブ板は昭和30年代ぐらいまで女の子は絶対行っちゃだめだと言われていましたし、我々も、中学生や高校生でもなかなかあそこを一人で通るのは、ちょっと怖い思いをしていました。これは安全・安心という意味では、ちょっと違うのかもしれませんが、街にそういうところがちょっとあっても、ドブ板の中にもうちょっとあってもいいのかなと思ったりもします。だからドブ板の通りの一本後ろ側だけでも、そのようなところがあるとおもしろいかなと、私は思っているのです。

○井田氏 イタリアの都市もそうなのです。都市計画で色のことや、ネオンのことなど、相当規制があります。あと、耐震性の問題もあります。石だともつかかもしれませんが、例えばローマのコロッセオなんて何千年も前の建造物がまだ残っていますが、日本だとやはり古いものは木造なので、昔のものを残すのは大変だと思います。しかし、そういった雰囲気や古いものを何か残してもらえるといいなと思います。色につい

ては、あまりごちゃごちゃしていると、どぎついと思いますが。

あと社会の動きの中で、バブルの時などはドブ板通りのお客さんは減りましたか。

○越川氏 バブル以前に客足が遠のいていました。

結局、米海軍の船が入れなくなると活気がなくなってしまいます。

○井田氏 昨日、ヴェルニー公園に行って、潜水艦を見ました。日本の「こくりゅう」というすばらしい潜水艦です。海上自衛隊の「こくりゅう」というのは、2つぐらいあるスクリューの音が小さくて有名ということでした。原潜も入港しているということですが、軍艦が見られるという港は、日本でも少ないと思います。

横須賀は戦後、第二の開港で終戦を迎えた日本が、ある部分、戦うとか、政治のことは全く抜きで、横須賀のきな臭い、戦争とかいうイメージをなるべく表に出さないようにやってきたと思うのです。

僕なんか高校でも、現代史という受験勉強して終わり、といった感じでした。

今、平成になって、やっと昭和のことを考え、明治から昭和にかけての日本について考えるようになってきました。このフォーラムで、久保木さんがいろいろ説明されるときに、お客さんが「ああ」「ああ」と声を出していて、地元にごく愛情を持っていることが分かり、すばらしいと思いました。

そのなつかしさというのものも、時代と共に変化していきます。僕は昨日、軍艦を見て感動しました。別に右翼とか左翼ではありませんけれど、「ああ、すごいなあ、日本もあるのだな」といったような気持ちがありました。別に恥ずかしいことでも何でもないので、そういうものを日本人の若い子にも、事実として見せればいいと思うのです。それに対して右・左とか、政



治的な考え方は自由ですけれども、横須賀の歴史や、現実に軍艦が存在している事実、こういうものがあるということを引きちんと説明してあげるといいと思います。軍艦や軍港といったイメージを、ドブ板とともに、すっきり出したほうが、横須賀というのはおもしろい街だなと感じると思います。横浜というと、観光地で甘ったるい感じがするのですけれども、ここは近代を引っ張っていた日本人の産業革命の原点、そこから歴史をずっと背負っているような都市の顔がありますので、それをきちんと皆さんにわかってもらったほうが、日本人のためにもなると思います。

久保木さん、お願いします。

○久保木氏 製鉄所ができてからの横須賀の商店の盛衰というのは、戦前は海軍に頼っていました。例えば海軍工廠ですが、軍事費が増えれば当然世の中は好況になる。軍縮になれば不況になる。要するに、横須賀の歴史というのは、そういった軍のあり方と関わってきました。



しかしドブ板は、ある意味では米軍オンリーだったのを脱却して、よそから人を呼ぶことによって活性化していくというような方向にしているわけですから、やはりまちづくりを考えていく際に、同じような画一的なまちづくりをしていったら、だんだんにシャッター街になって、だめになってしまうのではないのでしょうか。

ですから、個々の商店街が、かつてはそういう軍に頼り、戦後は米軍、自衛隊を頼ってやってきましたが、やはりそこを脱却しながら、よそからも人を呼べるようなまちづくりをしていかななくてはならないと思います。それを考えていくときに、何が売りになるかというところをいろいろ模索しながら、例えばドブ板はアメリカナイズされた、そういう商店街をつくってほしいのです。私も今日、どんな様子か見てこようと思って歩いてきましたが、朝からもう散策している人が店をのぞきながら通っていきました。

これから横須賀の中で、各地区が何を売りにしながら、どうやって街をつくっていくかというのが問われてくると感じました。

その辺り、山本さんご自身、生活がかかっていますから切実に色々と考えがあると思いますので、話していただけたらいいかと思います。

○山本氏 そうですね。先ほどちょっと言いかけて、時間がなくてやめてしまったのですけれども、横須賀の商人というのは結束力が弱いのです。みんな一匹オオカミなのです。だから横須賀から大企業が出ていないでしょう。さいか屋さんがせいぜいで、横須賀から出て全国チェーン展開している人はなく、みんなずっとお上のもとでもって、自分が食べられればいいやとしか思っていない人ばかりなのです。商売がだめになれば、ちょっとどこかよそへ行ってやればいいやみたいなところが多くあったのです。

そこで戦前に商工会議所ができました。横須賀のさまざまな業種がまとまった商工会議所が、それを何とかしたいという気持ちを持って、一つずつ対応したらどうですか、米海軍の中に一本くさびを打ち込んではどうですかというようなことをやっているのですけれども、なかなかまとまらないのです。

この問題について、呉や佐世保はもっと切実なもの

があります。実は、もう呉や佐世保は補助金をもらうということもして、補助金をくれないのだったら呉の街の中に入ってくるよそのトラックや、港に入ってくるよその船に、税金をかけさせてほしいとするほど商売がだめなのです。

軍人さんやそこで働いている人々は、基地施設内に協同組合ができていて、市価の1割引とか、1割5分引とかというマーケットがその中にできて、共同購入ができるようになっていて、外では買わなくなっているのです。

例えば横須賀の街でも、協同組合に批判的な発言をしたりすると、「おい、あの店で物を買うな」って言われてしまうのです。さいか屋さんなどはそれでずいぶん攻撃され、「あいつらは、国のためにならないぞ。あの会社は国のためにならないぞ」と言って弾圧されてしまうのです。

さいか屋さん規模になれば何とか持ちこたえましたけれども、個人商店でやられたら、すぐぺちゃんこになってしまうからということで、横須賀の商人たちは恐る恐る、恐る恐る商売をしていました。

そうではなくて、今、商店街の活動が最も活発にやられているところなので、これからはもっと胸を張って、ドブ板通り商店街振興組合も、組合の名前も変えて一つのまとまりとなって、昼間の顔と、夜の顔のドブ板ができると、私はうれしいなと思っております。

○井田氏 今、お話の多くは過去のことですが、これから未来に向けての、過去と未来の共生についてお話しさせていただきたいと思います。

先ほどドブ板のお話もありましたが、他によく日本で言われている、まちおこしといったようなエネルギーがあるようなものはありますか。例えば、僕は文化的なものをやっているのですが、文化のあるところには商売もあると思いますが、文化や教育などもすごく大

事だと思えます。企業の中でも、文化に対してお金を出したりすることもあります。

どうしても日本というのは、さっきおっしゃった行政の縦割りみたいなのところがあって、中央集権があって、上から下に、上から下にと、そういう構造がありました。

そうすると何か文化的なものをやろうとしても、上の方を見なければいけない。日本人はなかなか横にはつながらないのです。

僕はそこら辺を大きく変えたいのですけれども、これがとんでもない話でなかなか難しいのですが、商店街でも横のつながりをどのようにつけていくのか、専門家の人も必要だし、また専門家じゃわからないこともいっぱいあると思うのですが、なかなか難しい問題です。

今、イタリアでおもしろいのは、世界で言われているスマートシティというもので、今回、世界の二都市、アメリカとミラノで、テクノロジーの都会をつくるという世界的なプロジェクトが通ったのです。

そのテクノロジーとともに都市計画というので、相当時間がかかるとは思いますが、それはやはりテクノロジーと新しいまちづくりということをテーマにしているので、おもしろい発想の仕方もあります。

シンボリックなものをつくって、さあこれが記念品だとか、そういうように街の歴史を見るのもいいのですけれども、やはりもう少しソフトな構造で動いていかないと、本当の人間の面白さが都市の中に生きてこないと思います。都市のつくり方は難しいですね。

世界遺産に向けての動きとか、造船所のことなどお話ししていただけますか。

○久保木氏 近代化遺産が、どう生かされていくかということが非常に重要だと思うので、先ほども少し出ていましたが、今、横須賀で一番人を呼べるのは何か

という、変な話、軍港めぐりと記念艦三笠という形になっています。

そこに付随してドブ板通りをめぐる形になっているので、では他の地区はどうかのだと。やはり、久里浜、浦賀で細切れでやっている限りは、人の回遊というのは日帰りになってしまいます。三浦半島全体として、どのようにアピールしていくかも含めて考えなければいけません。世界遺産もそうですが、自然や歴史を含め、いろいろな資産があるわけですから、いろいろと日本中に知られた部分をうまく回遊できるように各市町村で連携していかななくてはならないと思います。そこで、市や町の連携というのがどうとられていくのか、一つの課題になっているのかなと思うのです。

個々のところがいくら頑張っても、やはり全体としての魅力をどううまく発信していくのかというのがないと、人は来ないです。

三崎にいっぱい人が来ています。でも三崎の中心街はもう空洞化して、それこそ小学生が何十人になってしまって、いずれ消滅してしまうのではないかと言われているような感じがします。

この前、神奈川新聞の記事にあったのですが、昭和館っていう蔵造りの建物を生かしながら、三崎の港町の歴史を含めていろいろ発信している場所があるのですが、大勢の人が来ているそうです。そういった一つ一つのところには魅力があるのだけれども、それが全体としてはどうかのかなという感じがあるので、そのあたりが課題なのかと思っています。

○井田氏　すごく難しい問題ですよ。まちをつくるというのは、本当に難しい問題なのです。

富岡の後で、明治日本の産業革命遺産というのが決まりましたよね。2年ぐらい前に九州・山口を中心に8件。

そういう動きが出てきたというのは、日本人の中か

ら、明治やそのくらいの時代をもう一回考え直そうという動きがあると思うのです。

その中で横須賀も、造船所、製鉄所などについて、どのように都市イメージをつくっていくかが課題だと思いますし、横須賀の街が遺産に入っていないことが残念に思います。

僕はポルトガルのポルトという北の港町でも仕事をしているのですが、その街は建物が煉瓦造でずっと上に続いていくような街並みになっています。ポートワインをつくっているところなのですが、その街が世界遺産になったのです。

僕はもう15年、そこで仕事していて驚いたのですが、世界遺産になったら観光客の数がすごいんです。前はホテルもなかった街に、すごい勢いで観光客が増えたのです。昔は漫画家の宮崎駿さん、あの人は映画をつくるのにその場所に行ってデッサンをするらしいのですが、宮崎さんがデッサンに来ていたそうです。僕が行っていた当時は、他に日本人はいませんでした。

今や中国人、韓国人、イギリス人、ドイツ人、すごい勢いで来ています。なぜかという、安い飛行機が鉄道を引くようにポルトに来られるようになったこと、世界遺産という、すごい観光事業が持ち上がってしまっているためです。

本当に観光というのは大きいものですし、横須賀のためにも何かうまく活用できると良いですね。ただ、遺産があるだけの、冷凍している美術館のようなものではなくて、今も生きているものとして街づくりをしていけるといいと思います。僕は横須賀という都市は今が過渡期みたいな感じがします。

○越川氏　昨年、横須賀製鉄所150周年記念事業がありました。これもやはり一過性で終わるのではなくて、継続してやっていく、ということをお願いしたいです。



お願いしたいというか、自分たちがやるわけですが、ことイベントなどは一過性で終わらせるのではなくて、活性化のために継続してやっていくことが大原則です。

我々も今、いろいろ努力しているのですが、単発で打ってもなかなか厳しいものがあります。今までの話を総合してみると、やはり一商店がいくら努力しても、今後は難しいと思うのです。



横須賀には、商店街のいいところがいっぱいあるのです。追浜、中央地区、衣笠、北久里浜、久里浜、浦賀とかありますよね。これらが一つの連合として、一緒に何かをやっていくことができれば良いと思います。

製鉄所150周年事業の際は、一番近い商店街でしたので、一生懸命やりました。でも下手すると一回で終わってしまうので、やはり商店街が連携して何かやれば良くなっていくと思います。横須賀というのは、他の市や県に比べて、行政と商工会議所がうまく連動して動いてくれていて、これを大事にやっていったほうが良いと思います。お聞きいただいている方はその辺よろしく願います。

○山本氏 世界遺産の話、それから軍港、佐世保と呉と舞鶴と横須賀でもって、そこに残っているさまざまな遺産を日本遺産にしようじゃないかという話があります。吉田市長もわかってくれたみたいで、日本遺産にするために、みんなでやりましょうって声だけ出しました。先ほどのお話ではないですけど、ずっと

横須賀は、軍のため、何のためというふう到我慢してきたので、私は我慢しないで話してみたり、ここで一回声を出したりするのもいいかなと思うのです。

どこに声を出すのかって横須賀市ではありません。世界遺産があるのは米海軍の基地の中です。世界中みても米軍の基地の中に世界遺産なんてないのです。実は今、1号から3号までのドックって、ほとんど米海軍の船が使用していないという状況なのだそうです。

3号ドックが一番大きくて、その3号ドックだけは海上自衛隊の船がしばしば使っているのだそうですけれども、思い切り米海軍に向かって、「あなた方は、あまり歴史のない国だけど、日本は長い歴史があって、この横須賀基地の中には世界遺産があるぞ」って声を上げてもいいと思うのです。いや、実は米軍のほうがずっと物を大事にしてくれているのです。米海軍が使っていたからスチームハンマーは残ったのです。

日本がもし使っていたら、「あ、これ、だめだ。こんな古いもの捨てちゃえ」と言った後、「それであれ、どうしました?」「捨てちゃいました」「あれ大事だったのに」と言って初めて、「え、そんな大事なものであったの」となると思います。日本人にとって、100年ってそう大した歳月ではないのですけれども、やはり100年ってすごい歴史なのです。

その100年の歴史、150年の歴史、今、越川さんが言われたように、150年というものすごく重い歴史があるのです。そのことを、もっとここからPRして行って、横須賀らしさをつくっていくといいと思います。基地ですからだめですよ、なんて我慢しないで、横須賀市が先頭に立って、はっきりと言ってみて、だめならだめでもって、また何か別の考え方があると思うのです。

最初からだめとも言われていないのに、だめだと言ってしまっただけなのです。製鉄所開設150年の時

に、だめだと思われていた1号ドックだけ米海軍は開放してくれて、11月14と15日の二日間に限定されましたけれども、そんなにやかましくなく入れたのです。やはり話をしてみなければだめです。物は食べてみなければだめ、話はしてみなければだめなのです。話をしてみて、そのあとでいろいろなものが決まるので、こちら側で何も最初から拒否意識を持たなくてもいいのです。誰が猫の首に鈴をつけに行くのか、嫌だったら民間で行けばいいのですよ。私、行きますよ。失うものは何もありませんから。肩書きを取られても平気ですし、何とか生きられるだろうと思うのです。

そうしたら逆にその肩書きを取られたことを、「前はこういうことをやっていたんですけれども、こんなことをやったら取られたよ」と、もっと売りに出してやりますから。



そういうことでやっていかない限り、なかなか横須賀は動かないのです。だから、横須賀市に何か任せるのではなくて、せっきゃくこれだけいろいろな民間の人たちが集まって、こういう景観フォーラムをやっているのですから、これはまさに一番いい機会だと思います。

私の友人で観音崎の弾薬庫改修工事の設計をした人がいたのですけれども、1棟つくるのに県の予算のうちの2分の1を使っちゃったのです。あと2棟建てなければいけないのですが、やはり昔ながらのいいもの

を残さなければだめだと思ったそうです。

先ほど井田さんが、向こうでは地震で崩れたら、昔のとおり直さなければならぬから、まだ全然工事が進まないですという話をしていたのですけれども、そのとおりだと思うのです。

今の制度で計画して昔のとおり直すと、強度の強いものができると思います。やはりお金はかけるときに掛けて、そして物を言える人が言うべきなのです。

せっきゃくこれだけの優秀な頭脳の人たちが集まってきてやっているのだったら、こういう景観フォーラムの中の決定事項でもって、「1号から3号まで世界遺産にしよう」「おおっ！」と言ったら、叶うかもしれません。今井先生が、富岡製糸場には本当に驚くほど人が来たと言っています。(拍手)

大変申しわけないのですが、富岡へ行ってごらんになるとわかりますけれども、四つ、周りにあと三つ、世界遺産の建造物がありますけれども、なかなか見て回るのは大変です。

でも横須賀の場合は交通の便がよくて回りやすい。記念艦の「三笠」があり、現在は3代目になっていますが、日本で最初の灯台だった観音崎の灯台があり、ペリーの記念碑があると、回るころはいっぱいあります。さまざまところへ行くことができるのだから、ここで、そのぐらいのことをやったら、未来へ伝える力となるのではないかと思うのです。(拍手)

○井田氏 そうですね。過去のないことは、要するに未来もないということです。

今、日本人の子供たちの教育のことを考えると、物事をだめだと言われると、簡単に、「あ、だめね」となってしまいうように思うのです。そうではなくて、前に少し読んだのですけれども、横須賀の幕末のときに活躍した方、何という人でしたか。

○山本氏 小栗上野介です。

○井田氏 その当時、幕府は大阪など西方に明治政府をつくることを進めていたところ、小栗上野介が特別な意見をもって「いや、東京にしよう」という一つの意見を出して、のちに製鉄所を横須賀につくる。やはり先見の明があったのでしょう。昔みたいに京都や大阪に中央を置くと今までと何も変わらない、変革ができないのではないかと考え、東京に新しくつくりました。新しく始めたほうがやりやすいという明治政府のあり方もあったみたいですね。

イタリア人なんか自分の意見ばかり言っていて、人の言うことを聞かないのですが、日本の方はすごく人の意見を聞いて、ぐっと我慢しますよね。それもまたすばらしい人種なのですけれども、そのやり方を認めるとともに、もう半分は、もう少し自分の意見をどんどん言って、市民が盛り上がり、市民のほうから、こういうことをやりたいのだと行政を巻き込んで一緒にやれば、すごく大きい力になると思います。経済ばかりではないのですけれども、でもやはり経済効果が上がれば都市が生きてくると思うのです。そうすればここに住みたい人も出て、いい学校も生まれるだろうし、いい教育も行われるだろうし、住みやすい横須賀というのができてくるだろう。そういうことを願いつつ、未来に向けて皆さん頑張ってください。

次に、関東大震災の話をお話させていただきます。

○久保木氏 今、防災という問題が非常に叫ばれている中で、関東大震災で、横須賀の街がどのようになったかということについてお話しさせていただきます。

先ほど、横須賀中央駅の近くから撮った写真を3枚お見せしたのですが、震災前は非常にごちゃごちゃした街で、道路も狭いものでした。

それが震災以後、広い道路になりました。

公共機関というものは散在していたのです。諏訪のほうに市役所があって、平坂の途中に警察署があって

というような形でした。震災後の埋め立てのところを含めて、諏訪小学校も諏訪町の高台で市役所の隣にありましたが、警察、郵便局、市役所、諏訪小学校まで全部、小川町辺りに集まりました。今、新しくまた埋め立てができて、第二の移動という形でそちらに移っていています。できるだけそういった自然災害や防災について考えながら、より指揮権等含めて、集約しやすい形になっていったと思うのです。



震災前はそういう発想がなかったから、あちこちにいろいろなものがあって、連絡がうまくいかないようなところがあったと思うのですけれども、震災において、瓦ぶきの屋根の木造二階建てが一番被害が大きくて、ほとんど倒壊しているということなのです。

石造りや木造煉瓦造りの丈夫な耐火煉瓦はともかく、そうでないところは、やはり大きな被害を受けてしまいました。民間の建物の中で鉄筋コンクリート造はほとんどなかったのですが、耐火煉瓦のところは非常によく残っていたらしいです。

そういう意味で、先ほどのかくかくした新しいまち、鉄筋コンクリートを含めた新たな耐震のまちづくりが、震災を契機にできてきたということなのです。どこのところもそうなのですけれども、わらぶき屋根というのは余り壊れなかったらしいですね。どうしてか。やはり荷重がかからないことがあると思います。トタン屋根、わらぶき屋根は大丈夫で、重い煉瓦は危ないと



いうことでした。また、屋根がスレート瓦でできた建物というのは、非常によく残っていました。ですから、煉瓦造の旧来の商店は、その段階でなくなっていました。

震災以後の商店は、看板建築とよく言われますけれども、ああいう形に移ってくるのが一つの傾向だったのですけれども、人間って、やがて忘れるのです。やはり瓦のほうが、かっこよく見栄えがいいということで、後にまた瓦屋根の建物も増えてきます。そして、忘れたところにやってくる災害によって、やはりそういった建物が繰り返し被害を受けるのです。

一時危ないからといって堤防の内側にいた人が、だんだん外側に出て、今度の大津波で流されました。あれも結局、一時は危ない、危ないと言っていたものが、実際に現実になってやってくるのだということを常に考えることが大切です。それと同時に、やはりまちづくりの一つの観点として、そういった震災の経験を教訓とし街をどう守っていくかを、行政がどのように捉えて考えていくのかということは、すごく大きな問題かなと思います。

○井田氏 今度は建物の、形式といった側面からいろいろ話していただかなければいけないのですけれども、イタリアというのは歴史的にも世界的にもすごく重要で、イタリアの建築は、ローマから現在までずっと残っているものもあったり、16世紀などに建築様式の大きな変化もあったりしましたがけれども、現在の建物の中にいろいろと残っているものがあります。ローマで、カーブが通ってと言うのですか、足みたいな大きな柱があつて。そういったアーチ構造の建築方法の発達によって、水道事業など広く発展しました。

確かに先ほどから話が上がっている建物の構造の問題ですが、僕は日本人の生き方の都市があるはずだと思うのです。昔は戦後の建物が残っていて、緩やかに

存在していたはずなのですけれども、それが震災という災害によって一気に切られてしまった。だから丈夫なコンクリート造がいいのではないかとすると、日本の気候にもあまりコンクリートは合っていないのかもしれないと思うのです。瓦だけが良いということもないのですけれども、その中間みたいなものを新しく未来の人たちにつくってもらえるといいですね。やはり、街中がコンクリート潰けみたいなものはつまらないものになってしまうのではないのでしょうか。僕なんか、長年向こうに行っていると、やはりしょうゆの味が恋しくなります。1日に一度は、しょうゆで刺身を食いたいとか、なつかしいような気持ちになるのです。これ、自分たちの肉体、体に入っているものなのでしょうね。都市というものも同じだと思います。僕たちは日本人の体であつて、アメリカ人やヨーロッパ人の体ではありませんから。

それからもう一つやわらかい話で、EMクラブという建物ですが、横浜などにもあるダンスホールで、キャバレーと言われるかもしれません。アメリカ人が音楽をやっていたと思うのですけれども、僕もこけら落としをやらせていただいた横須賀芸術劇場と同じ場所にあつたとお聞きしました。やわらかいものが同じところにつくられましたが、丹下さん設計の横須賀芸術劇場のほうが、ずいぶん固くなっちゃったみたいですね。立派なものを建てちゃった。戦後のそのお話を聞かせてください。

○越川氏 あれが建ち上がった当初は、井田さんも言われたように、横須賀のシンボルという形で計画されたようです。それはそれでいいのですが、構造自体が内部で分けている構造なので、表に発信するものがないのです。せつかく1、2階にテナントが入るのですが、なかなか表に発信できていないのです。

これがちょうど京急汐入の駅をおりて、一番見える

ところにあるものですから、劇場そのものはいいのですが、複合施設なので、それに付随した店舗があるのにその店舗が内部にあるものですから、表に発信ができないのです。せっかくあるテナントが半分死んでしまっているというところがあります。

これはやはり根本的に直しようがなく、あの丹下さんが設計したものなので、誰も何も言えないということです。

○井田氏 丹下健三さんという有名な建築家の方がなさったというのは聞いていました。先ほどもお話しさせていただきましたが、空間をつくるということは自分がその中で生きているということだと思えます。うちでもそうなのですが、変なふうに直そうとすればずっと気持ち悪いような気持ちが残ってしまうように感じます。例えばヨーロッパの教会というのは、すごく理屈に合っているつくり方なのです。その方角というものも含めて、全てが計算された造りをしています。気候や宗教、そこに生きている人とうまくマッチしていて、ああいった空間をつくりあげたのです。

ミラノにドゥオーモというの、300年、400年かけてつくったゴシック建築の大聖堂があって、よく観光客の方が行かれると思うのですが、この間、その中の一番初めにオペラの演出をやらせていただいたのです。

普通、宗教的な理由で、教会の中でオペラをやってはいけないのです。それが少し緩和され、イタリアのエキスポでもやってもいいよという話があり、うちのアバードという音楽家と、大学の企画で演出をやりました。教会の中で一人で夜中の12時ごろまでずっと稽古していると、特別な空間、聖なる空間というものを深く感じる事が出来ました。街の中にそういった空間を取り込んでいるのです。

ただ、日本の建築というのは、西洋より、はやりす

たりというのがあります。洋服も同じで、今、クールジャパンとか言われて、そちらのほうが重要だと思われがちなのですが、やはりイタリアの職人がつくったワイシャツが何十年経ってもびちっとしているのを見ると、どうしても、その当時ののはやりの建築ができちゃう日本建築はどうなのかなと思うのです。やはり、何十年と経ったときに、今生きている若い人も何となくちょっと違うのではないかと感じてしまうのではないのでしょうか。建築家がつくる空間というものは、やはりその人の精神性が出てきます。例えば茶室の空間って、何も無い空間にしているからいろいろ動けると思うのですが、大きな建物の内部空間を区切ってデパートみたいにしちゃうと、建物は大きいけれど自分が小さく思ってしまうような、何か威圧感みたいなものを感じさせると思うのです。また時代が変わると、黒川紀章とかまたポストモダンの磯崎新とか安藤忠雄とか、有名な建築家の方がいろいろな建築をつくっています。この間騒がれていた国立競技場の問題も、当初の設計者のザハ・ハディドさん、建築家の方はご存じだと思うのですが、彼女の設計した建築物は何せ金がかかるのです。なぜかという、あのカーブが好きでしようがないようで、あのカーブの設計はコンピューターでやっているのですが、普通ではちょっとできないくらいなのです。やはりこの設計でやろうと思った人は、最初にどのくらい金がかかるかわかっていたのだけれども、黙っていたのですね。

ただ、彼女の発想の仕方はすごくおもしろいのです。うちの劇場で、いろいろ有名な建築家の方に、靴のデザインをしてもらっているのですが、あの人がデザインした靴なんて履いて歩けないのです。でも発想の仕方がユニークで、おもしろい空間をつくるのです。

コンクリート造で建物が四角になってしまったと、

さっきお話にありましたが、角が立つではないですけども、そういうまちづくりをしてしまうのは全然おもしろくないと思います。やはりこれからは少し有機的な空間構造というのがいいのではないのでしょうか。例えば昔の茶室など、そういう意味では西洋人はすごく東洋に学んでいるのです。



近年、世界はグローバル化されていますから、昔、フランス人がここへ来ていいものをたくさん伝え、そこからまたすばらしい日本人が生まれたように、まちづくりにおいても何かもう少し開いた形で世界と共同でやっていくと、びっくりするような都市ができる可能性はあると思うのです。日本は金もあるし、アジアの代表となる都市ができるんじゃないかと思います。

東京の風景というと、海から見えるビルディングでしょう。また、上海も海から見て同じようにたくさんのビルが見えます。みんなああいう感じになってしまう。ニューヨークみたいになってしまう。だからつまらないと思うのですが、つくったものは壊せないし難しいと思うのですが、ヨーロッパなどの感覚だと、その中を改造していかに新しく再生するかということを考えるのです。

EMクラブというのは、アメリカ人の方は、遊行で使われていたのですか。

○山本氏 下士官兵の集会所でした。ジャズの発祥の地なのですが、ドブ板の商店街としては、その辺の音

楽のことは、どんなふうを考えているのかな。

○越川氏 つい最近、ヨコスカ・ジャズ協会が発足して、今年、もうすぐ動いていきます。もともと横須賀はジャズの発祥の地ですから、それを大事にしたいということで、市や県や国などのバックアップを受けながら。原信夫さんを顧問にお願いし、昨日いろいろ話しました。

これも街をあげてやっていきたいと思っています。毎日、ジャズが流れている、音楽が流れている、そういったものにしていきたいです。それには、私も協賛して、今後これを街のシンボルの一つにしたいと思います。

○井田氏 今、ジャズの話が出たのですが、ご存じのようにイタリアも敗戦国なのですが、日本もそう、昔から多少あったのかもしいですけど、戦後アメリカ人が入ってきて、アメリカの音楽、ジャズというものが広がっていきました。イタリアのジャズというものもすごく有名なのです。すごくすてきなので、何かありましたら相談して下さい。イタリア人のジャズというものなかなかすばらしいですよ。

○越川氏 わかりました。

○井田氏 では、質疑応答に移ります。パネラーの方々、少しずつ答えていただけますか。

「JR横須賀駅周辺における街がつくられた歴史を教えてください。例えば駅舎と街の関係、JR横須賀駅と汐入駅が離れている理由。」

○久保木氏 横須賀駅の周辺が街になっていないというのがあります。やはり一番基本的な問題は、ちょうど駅ができたときに、あそこが大火事になって、もともとあった街が消滅してしまったことです。旅館街、船宿があって、要するに明治18年までは、あそこが横須賀の玄関口だったんです。

よそから横須賀に来る人は必ずあそこから入り



ます。陸路というのは十三峠のすごい山道で、ほとんど人が通らないのですよね。だから船でみんな来ていました。

現在はヴェルニー公園ですが、そこが火事になって、軍用地になりました。柵の部分が全部軍用地になってしまったので、まちをつくる場所がなかったということが、やはり一番大きな原因です。駅前には多少食堂とかいろいろなものがありましたけれども、続く場所が崖ですから、少しずつ削りながら、今、ああいうふうになっています。もともとはあんなになかったので、震災で崩れるくらい、道路がないということです。それから明治18年に軍港指定され、あそこに船が入れなくなりました。どこへ来たかという小川港のほうに、汽船が来ました。横須賀駅はどちらかという軍用鉄道という要素がかなり強いし、観光に来る人は主に小川町のほうから来ますから、逆にそちらのほうに旅館が移っていきました。もともと湊町にあった三富屋の支店とか鈴木屋の支店とかは、そちらに新しい店を出してしまっていて、そういう意味では、海路は小川町の港のほうで玄関口という形になっていきました。

なので、横須賀駅周辺にはなるべき土地がなかったもので、まちができてこなかったということになるのです。

○山本氏 横須賀駅、もともと、これ、逸見なんです。このエリアは逸見なんです。横須賀駅ができるということで、横須賀町民は、このころまだ「町」ですから、「やった。横須賀へ鉄道ができるぞ」って大喜びしたんです。その当時、横須賀新報という新聞が出ていたのですけれども、みんなで横須賀駅をどこにつくるかというのを、その新聞などで随分やるのです。

やはり、現在の汐入ぐらいのところまでは持っていたいとなりました。観音崎に陸軍の砲台がありましたから、もともとこの鉄道は、横須賀を通過ずっと

観音崎まで弾薬を運んだり物資を運んだりするための鉄道路線として計画されていました。陸軍は、観音崎まで引けと言っていたので、初めこれは仮の駅だよという話でした。



今、久保木さんが言われたように、ちょうど鉄道が引く半年前にここが焼けてしまっていて、駅前には民地があって、旅館があって、たくさんの方が泊まっていました。先ほどお話をさせてもらいましたが、一日に100~200人という人が泊まって、毎日ここを見ていて、何か秘密まで見られてしまっているぞとも思ったのでしょうか、海軍は、これはあまり好ましいところではないから何とかしたいと言って、この辺から燃えたのですけれども、横須賀駅は横須賀町民のために、これは仮駅だと言っていたのです。

仮駅であるから、そのうちこの辺まで伸びるからねと言っているうちに、海軍用地になってしまいますから、できなくなってしまいます。そうしたら明治22年4月1日付で逸見村が横須賀町に編入されてしまうのです。だから横須賀町になっちゃうだろうって。逸見村は横須賀のうちという、そういう理論で、この場所になりました。

ここにずっと引き込み線があって、今、ここにレールが走っていますが、横須賀駅は旅客もありますが、海軍の基地の中に物を運ぶためのレールがずっと引かれていました。

今のヴェルニー公園の脇のところにはずっと引き込み線のレールがあったのを覚えていらっしゃる方があると思いますけれども、そういうためにつくられた意味合いが強いので、駅の場所が街の外れになってしまいました。逆にいいますと京急は、そのときは湘南電車とっていたのですが、湘南電車が一番繁華なところを通るようにトンネルとトンネルの間を通ってくるわけです。

汐入駅も最初、横須賀軍港という駅だといっていたのです。それではこの駅は軍港の目の前だというのがわかってしまうから、名前を変えろといつて、それで最初は横須賀汐留と駅名が変えられました。ですから、横須賀軍港の後、横須賀汐留といつて、それから汐入に変わるのですけれども、こういうような経緯がありました。

JR横須賀駅のことを「あ、あの駅。そう、階段のない駅」と、駅に階段がないことがよく知られていますが、それはそれほど自慢することではないのです。結構あちこちにあるのです。

もっとすごいのは、横須賀駅には1番線のホームがないのです。ホームは2番線と3番線だけで、2番線は行き止まり、3番線だけが衣笠のほうへ行っています。1番線のない駅なんていうのは、全国で横須賀駅だけです。2番線、3番線のない駅はいっぱいあるのですよ。でも2番線と3番線があつて、1番線がない駅というのはいないですから。これはもっと横須賀、PRしなければいけないと思います。変な自慢ですけれども。

では、1番線どうしたのかといいましたら、1番線は実は脇にありまして、これ、皇室専用だったのです。船がおりるたびに、皇族の方が来るのです。ここでおりる船は、全部、天皇陛下の船ですから、進水式のたびに、天皇陛下が来られました。都合が悪ければ、皇

后陛下が来、または皇太子様が来、何とかの宮様が来るという、必ずそういうふうに来ていました。

その方々は全部、鉄道で来ましたから、この1番線でおいて、駅の貴賓室で休憩されて、海沿いを通って、進水式会場に入りました。もともと1番線はそういう使われ方をしていたので、戦後は必要がなくなり、1番線自体が廃止になってしまいました。

だったら変えればいいのかと思うのですが、あれ、海側にあるホームから1番、2番、3番をつけているのです。東京駅は逆なのですよ。東京駅だけは皇居に近いほうから1番線なのです。

本来は海から近いほうが1番線となっているのですが、1番線が廃止になってしまったために2番線と3番線しかないのです。この経緯からしても、かなりこの駅はおもしろい駅なのです。



JR横須賀駅だけ探索しても、例えば屋根をついている鉄が、明治5年ぐらいに東北線で使われていたドイツ製のレールであるとか、イギリス製のレールであるとかということがわかります。今度、横須賀駅に行かれた時は、じっくりと中を歩いてみてください。変な人と思われま。

○井田氏 2番の質問にいかせていただきます。

「浦賀にしろ、ドブ板にしろ、実際に訪れるとイメージと相当異なり、がっかりすることが多いです。イメージと実際とのギャップを埋めるにはどうしたらいい

いでしょうか。」

では、越川さん、どういう意味合いが分かればお話しいただけますか。

○越川氏 私は商店街活動35年間、去年までは商店会会長を15年間やってきて、その後、理事長になりました。35年前からとにかく街に人が来なくなって、さっき山本さんが言ったように、あの街には、足を踏み入れてはいけないというときもありました。



それから35年、当時、私も30歳くらいで、今年68歳なのですが、ドブ板バザールのはしりをやってきました。とにかく人に来てもらいたいということで、同じような人達が集まり、捨て看板をつくって、三浦半島へ張りに行ったり、いろいろな努力をしたりしました。

当初は年に1回だったのが、年2回になり、今、年4回、そういった活動をしているのですが、当初は、やれば人が来ました。

ところが、やはりマンネリというか惰性でいっているようになるものですから、なかなか継続していくのは難しいです。

ただ、一昨年あたりから、国の補助金等を仰いで、毎日がアメリカンストリート事業ということをやりました。2年前に神奈川県賞もいただいたのですが、とにかく毎週末何かやろうということで、商店街の前のイベント広場を使って、無料の英会話教室とかイベントを打ち出しました。

その結果、人は集まりました。ところがやはり、賞をもらったとしても、それだけだと、その年度が終わってしまえばもう終わりですから、また客足は落ち込んでしまいます。

ご質問にあるように、イメージと相当異なりがっかりする、とのですが、とにかくいろいろなことをやってきて私が思うのは、せつかくここまでやってきたのだから、今後は、私に続く若い世代にうまくバトンタッチして、ドブ板の街がもっと良くなるよう努力していきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。

○井田氏 大変なお仕事ですね、越川さん。僕は芸術監督を30年ぐらい劇場でやっていますので、全く同じことを思います。観客を集め、どのように楽しんでもらうかという相当な努力が必要です。イベントはなくしてはいけないし、何かほかの企画も必要だし、相当な配慮を必要としますから大変ですよ。

では3番目の質問、また越川さんです。

「ドブ板通りにはミリタリーショップやスカジャンのお店などが多く、商店街の特徴になっていると思いますが、何かまちづくりの工夫を行ったりしていますか。またこれからもドブ板通りらしい特徴を維持できるでしょうか。」

○越川氏 答えは簡単に。今後とも努力します。

○井田氏 でもおもしろいご職業ですね。

○越川氏 そうですか。

○井田氏 やりがいがありますね。商店街に人を呼び、どう盛り上げていくか、おもしろいではないですか。まったく演劇空間と同じですよ。越川さんに、どこかの芸術監督に赴任してもらいたいですよね。

次の質問です。

「ドブ板通り周辺は、特に英語の看板などが多く、米軍と共存しているような雰囲気があると思います。戦後すぐにこのような雰囲気にならなくなっていったの

ですか。」

○越川氏 そうですね。米軍に接收された後、街の商店主は、それまで日本海軍のための御用聞きとかやっていたのが、どんどん変わっていきました。一つには、米軍さんが戦地から帰ってくると、とにかく歓楽街に行きたいということになりますよね。そうすると、今まで洋品店だった店が外人バーになるということがありました。

どんどん大きく変わって行って、その名残は今も残っているのですが、私は今後とも変えていくつもりはありません。やはりうちの一つのシンボルとして、壊してはいけないし、これは残していくつもりです。

○井田氏 次にいきますか。

「パネラーの皆さんは、汐入から横須賀中央付近がどのような街となったらよいと思いますか。」

では、久保木さんからお願いします。

○久保木氏 やはり難しいですね。今、ドブ板の成功は、他の街にはないそういう特色を打ち出したということだと思います。他のところにああいう街ってないのです、やはりそういうところが人を呼べると考えると、では、他の横須賀の商店街がそういうようにできるかとなったときに、同じようにはなかなかいかないと思うのです。

ですから、そういう意味では、やはり非常に難しいと思います。ただ、今の状況でいいわけではないので、そこを何とかしていかないと、「横須賀＝パチンコ屋」という印象ぐらいしか残らないと思うのです。今、私がよそから来て感じるのはそうなのです。

横須賀中央の中心市街地は、今、行くとすれば、宴会があつて行くか、あとは、パチンコはしませんけれども、パチンコ屋はなかなかにぎわっているように感じます。そういう意味では、一番街らしいというのは、三笠ビル商店街の中でしょうか。大勢、人が歩いてい

て、やはりあそこは、何か人を惹きつけるものがあるのかなと思います。

よく行く衣笠は、いろいろな店がありますが、割と食べるものが多いところなのです。衣笠はそれなりに人がいますけれども、大きな店ができたときに、そこに対抗して生き残っていくというのはなかなか難しいかと思います。

久里浜は、私がいたころは、結構、商店街がにぎわっていたのですけれども、このところ、あそこの大きな店に食われちゃって大変なんだろうなと、まともに感じてしまいます。

そういう意味で、答えを出せと言われても困るのですけれども、やはりどう他のところと差別化し、おしゃれなファッションの街にするとかして薄利多売の大きな店に負けないような商店街をつくっていかざるを得ないだろうなというように思うのです。しかし、ではどうしたらいいのだと言われると、そう簡単に答えは出せません。

○越川氏 今、行政と一緒に「ドル街」というのをやっています、今年で3年目になります。福生のほうへ視察に行って、実際見てきました。

各家庭に眠っているドルがあると思いますが、ドブ板の場合は、飲食とか店舗でそのドルが使えるのです。

今、うちの商店街含めて中央地区まで、1年中それが使えるような努力をしています。眠っているドルがあればどんどん持ってきてもらって、商店街で使ってほしいという企画です。やはり行政の方々の努力で、ここまで来たので、何とかこれは継続して、年中行事として行なっていきたいと思っています。おそらく、1兆円ぐらい、日本のたんすの中に眠っていると想定しています。それを持ってきてもらって使ってほしいのです。まだ当分時間がかかるとは思いますが、海外旅行に行って余ったお金を商店街で、いろいろな形で消



費してほしいというのが、私の希望です。

○井田氏 ドルが使えるんですか。ユーロはだめですか。



○越川氏 両替だったら、オーケーです。

○山本氏 今の商業の状態、特に小売店の状況の中で、商店街をどうするかというのは、本当に難しい時期に来ています。私のところも小さな書店をやっていますが、なかなか書店のお店だけで食べるということも難しい状況になってきています。そういう中で、商店街をどうするか、どうしても商店街の体力がなくなると、行政に頼んでということになるのですけれども、横須賀の場合は、商店街が体力をつけようとしませんが、越川さんのところ、ドブ板通りはちょっと違うのですけれども、横須賀は自分たちの体力をつけないで、何でもお上任せ、要するに役所任せというところが、ちょっと色濃く見えていたかなということを感じているのです。

最近、その辺を脱却しているのは、追浜のエリアで、追浜の人たちは、やはり自分たちの力で、また、企業の方々とコラボをしながら、うまくいろいろなことをやっていっていると思います。その辺のところのうまさがあるので、横須賀の場合も、このJR横須賀駅から始まって中央駅までのエリア、もう少しいうと米が浜、県立大学までのエリアをどのようにしていくか、どういうコンセプトを持っていったらいいのかを考えていく中で、今の「ドル街」なんていうのはおもしろ

いと思うんです。

これ、横須賀らしいものがありますし、そういう中で体力をつけていながら、行政が応援させてくださいというような商店街にしていくのが、まず初めだと思のですけれども、この、行政が応援させてくださいと言わせるまでが大変です。これは相当各商店に体力がないとなかなかできないことなのです。

現状としては、非常に難しい問題であることは分かっています。あえて言いますと、横須賀ほど行政体質、これは海軍さんの時代、その前の浦賀のお奉行所の時代からずっと行政依存型の体質がありました。その行政依存型の体質から脱却する時期が来ていて、本当に生き残ろうと思う連中が、必死になってやってくる時代にきているのです。そういう中でおもしろいことができてるのではないかと思います。

このような中で越川さんのところが、毎週末いろいろなイベントをやるってこれ、すごく大変なことだと思うのですけれども、そういうような仕掛けをたくさんやっていかなければいけないと思うのです。

今度、バレンタインの日に商店街で花火をやります。逆に言うと、夏場なんかはどこでも花火をやっているのです、冬の花火のほうが値切れるのです。花火屋さんだって喜ぶわけです。冬のほうが冴えていますから、花火は音がいいんです。音がいいし、空気が澄んでいますからきれいですし、そしたら冬の花火やろうよってなりました。横須賀の寒さなんて大したことないじゃないですか。すごい、寒い、寒いといったところで、そんなにすごい寒さではないので、寒ければ温かいものを用意して待っていてあげれば、必ず寄るのです。寒いから帰ろうというのではないのです。「暖まって帰ろう」というのです。そういう努力がこれからは必要になってくるかなと思います。

そういう行政依存ではなくて、なるべく自分たちで

できる範囲のことから始めてやっていくことが大切です。そうしたら、「すみません。行政も一緒に手伝わせてください」って、経済部長が謝りに来るようになります。経済部長が謝りに来るような形でもってやれば最高です。そういうような形のものをしていかない限りは、ちょっと難しいかなと思います。

先ほど浦賀のイメージが相当異なると言われました。浦賀のイメージってどうしてもやはりペリーの来航というイメージで来るのです。ペリーの来航の地で有名なものですから、地方の街へ行って遊びに行ったときに、「どちらからいらっしゃいましたか」と聞かれ、「横須賀」と言うとぴんとこないところが、「浦賀」と言うと、「あ、知っている」となるのです。

知っているはずはないのです。知っているはずはないのだけでも、聞いたことはあるということで、要するにペリーの来航で聞いたことはあるから、浦賀は知っていると言われます。

ペリーの来航を示すものは、浦賀に一切何もありません。もう近代になってからは、浦賀は造船の街で、造船の街の痕跡はまだたくさんあちこちに残っていますけれども、ペリー来航のものは何もなくなってしまいました。ですから、これは私事になりますけれども、2020年に、浦賀奉行所開設300年という企画で、浦賀奉行所を復元しようと思っています。これも行政に頼まないで自分たちの力でやろうと思っています。

実は浦賀ドックというのは、大きな財閥が入ったわけではなく、中島三郎助という人、一人の人物が夢抱いていた近代造船というものをかなえようじゃないかといったのが始まりなのです。中島三郎助の友達がみんな集まってお金を出して、中にはもちろん、榎本武揚ですとか、そういう大物もいましたけれども、でもそれだけではなくて、集まったみんなの力を結集したのです。

ですから、横須賀の顔になる商店街をつくろう、横須賀もそういうものやろうといったときには、皆さんの力を借りて、また皆さんが「ああそうだね。そこだったら行ってみたいね。お金出してみたいね」というようなまちづくりをしていけばいいのかなと思います。そのためには、抽象論ですけれども、大変な苦労が必要で、越川さんみたいないいリーダーがいえないとは思っています。

そのためには、井田さんみたいに、やはりいろいろな世界の人たちの話も聞かないとできないと思うのです。

一番だめなのは、成功した例だけしか言わない学者です。どこのまちづくりは俺がやって、あれで成功したと言うのです。駅ビルのあるようなところでは、大体、成功するところでしか駅ビルはやらないですから。先ほど井田さんがおっしゃった、新潟の駅を降りても東京の駅を降りてもあまり変わらなくなっちゃったって言われるようになってしまうのです。

そういうつまらない学者にお金を払うのでしたら、民間のアイデアを持っている人たちを使って、しかもそこで生活している人が一番いいんです。その人たちは、それで失敗すると食べられなくなってしまうかもしれないので必死になります。そういう人たちと一緒に手を組んでやれば、絶対にいい街ができると思います。

この横須賀は、近代歴史遺産をたくさん埋蔵して持っています。これは、もう本当に持っているので、発掘すれば発掘するほど、先ほど井田さんは石の建物のことを言っていましたけれども、私はあえて木造に断定しますと、大正の関東大震災以後にも建てられた木造の建物、例えば上町へ行ったら、看板建築というすばらしいものがあります。あれだけ看板建築の並んでいるストリートはないです。日本国中行ったって、あ

れだけの看板建築が固まっているところはないですから、私たちがもっとそういうものを認識すると、絶対にいい街ができると思います。

あえて木造で頑張ろう。木造だって頑張れば、法隆寺だって世界最古です。木造頑張ろうというところで、以上です。

○井田氏 最後の質問になりますけれども、

「イタリアは古い建物が多く残っています。海外ではどのように近代遺産や古い建物を生かしたまちづくりを行っていますか。」とのことです。

ミラノの近代遺産って言われましたけど、向こうは古代のものが残っています。イタリアは古代、中世、それこそ何千年のものが残っていますので、まずお金のほうはそっちのほうに回っていきます。近代遺産まではなかなか回らないかもしれませんが、市とか、それから州といわれるところから、補助金が少しは出ると思います。

そう考えるとミラノというのはある種、近代都市なのです。アールヌーボーというのですけれども、独特なアールヌーボー的な美術、建物がいっぱいあります。最近はそのような建物を見て歩くというツアーがあります。豪華なブルジョア、金持ち連中や商人が、その当時、金をとってできた大きい建物やそういうものも、やはり文化庁のほうから特別な援助金をもらって、残しているという状態です。

もうちょっと時間があるそうなので、他にご質問などありますか。

○来場者1 横須賀はアメリカとの関係で、すごくスムーズに思っていると思うのです。沖縄なんかの問題を見ても、案外、まだ、ひねくれるような問題にはならず、日米関係が一番うまく思っている土地の一つだと思うのです。

それだったら、アメリカ人もそれなりに努力してい

るし、日本だってできるだけ支援をしています。こういういいところを、ドブ板さんなんかは、本当に使えるのではないかと思いますのです。

アメリカ人もドブ板にはスムーズに入っていくし、受けるほうもスムーズにやっているといます。全般的に見て、横須賀市とアメリカの基地と、全ての面でうまくいっているのではないかと。これは、売り物になるのではないかと私は思っているのです。

○井田氏 そういうことですが、いかがですか。

○越川氏 これには大変暗い過去があるのです。はっきり言わせて、こういうような状態になるまでは、本当に大変でした。こと商店街からしていうと、シャッターは蹴られるは、けがはさせられるは、殺人事件は起きるは、とか、いろいろなことがありました。

それも、絶え間ない米軍との折衝で現状があるのですが、一つには、過去の司令官で親日家の人もいて、そういう方々が、入ってくる米軍人に対して、教育をして、それが終わらないと米軍基地から出られないと決まったことがあげられます。

もう一つには、今言われたように、横須賀という基地が、佐世保、沖縄などに比べて本当に友好的な街であったと思っています。こうなるにはやはり過去の努力があったと思いますが、うちだけではなくて、基地の周辺の商店街、町内会がいろいろな努力、会話をしてきました。その対話のおかげで現状があるのです。

また今度、「G・W」から「レーガン」に変わって、母港化されましたよね。そういう中で、確かに「レーガン」の乗組員はやってきます。ところがそこに付随してくる戦闘機は厚木のほうに行ってしまいます。ですから、騒音問題の観点からいうと我々はないので、その辺は救いですが、とにかく対話や折衝を重ね、今の現状があるのです。

○井田氏 よろしいでしょうか。はい、次の方どうぞ。

○来場者2 私は横須賀に住んで14年ぐらいしかたっていないのですが、非常に横須賀は好きです。やはり、製鉄所ができて150年という今までの歴史を、学校の中で全然教えていないというのが大きなところで、若い人が全然認識していないというのが大きな問題だなと思っています。

また、越川さんに質問です。ドブ板通りというのは、両側に建物があって、怪しげなところが一番いいと思っているのですが、最近どうも建物がぼつぼつとなくなっているというのが非常に寂しいので、それを壊す前に、ぜひとも何とか残すような形でやってもらうのがいいのかなというのが要望の一つです。

それからもう一つ、夜にいろいろな飲み屋があるのですが、ちょっと何か一般の日本人には入るのは怖いだろうなというところがあるので、ぜひとも安心な店とか、初級用、中級用、上級用とかというのをつけてくれると入りやすいかなと、そういうのが昼間もあってもいいかなと思っているので、どうでしょうか。

○越川氏 はっきり言ってドブ板の場合、夜の商売をやっている印象の店は、うちの商店会じゃなくて、別組織をつくってやっているところが多いのです。

ところが、そちらのほうは衰退してきたから、夜の店の方々がうちの振興組合に入ってくるということが増えてきました。そういう方々に、今、昼間の2時～3時からオープンしてもらおうようお願いしています。

さっき山本さんも言われたように、ドブ板というのは、昼の顔と夜の顔の二面性があるので、入りにくいとかいうのはあるのですが、とにかく自分からトライしてみなければだめですね。トライして、多分、ボディランゲージでできますから、今の米兵の方たちは、こちらから「こんにちは」とやれば返してくれます。昔は全然そんなことしませんでしたけど、今は何で

もいいです。やれば返ってきます。そういうことです。

○井田氏 僕の生徒でもアメリカ人がいるのですけれども、歴史も随分変わって、米軍の方も変わりました。やはり戦争という歴史はありますが、今やグローバル化されて、一応アメリカでも日本と共存していくという、そういう姿勢になっていると思うし、軍の兵隊たちも若い方もそういう意識は持っているはずですよ。またこれまでと違った待遇の仕方があると思います。

僕はたまに横須賀に来て街並みを見て、皆さんの横須賀に対する愛情と、それから何か工夫して、すばらしい都会になっているのを楽しみにしております。ミラノでも宣伝しますので、よろしく願いいたします。

(拍手)



## よこすか都市景観協議会

### 【会員】10団体

一般社団法人 神奈川県建築士会横須賀支部  
一般社団法人 神奈川県建築士事務所協会横須賀支部  
ミーズ設計連合協同組合  
公益社団法人 神奈川県宅地建物取引業協会横須賀三浦支部  
公益社団法人 全日本不動産協会神奈川県本部横須賀支部  
横須賀建設業関連団体協議会  
・一般社団法人 横須賀建設業協会  
・横須賀建工同志会協同組合  
・一般社団法人 横須賀三浦建設協会  
・横須賀電気工事協同組合  
・横須賀管工事協同組合  
・横須賀緑化造園協同組合  
・横須賀三浦塗装工業協同組合  
・横須賀内装事業協同組合  
・測新会  
公益社団法人 横須賀青年会議所  
東芝ライテック株式会社横須賀事業所  
横須賀商工会議所  
横須賀市

### 【オブザーバー会員】3団体

神奈川県横須賀土木事務所  
東京ガス株式会社横浜支店  
東京電力株式会社藤沢支社 [順不同]

### <事務局>

横須賀市都市部市街地整備景観課  
〒238-8550 横須賀市小川町 11番地  
TEL:046-822-8377 FAX:046-826-0420